

雅子
敬
水
ず

石田
雅子

稚子 薨れず

石田 稚子



表 現 社

昭和二十四年八月五日印刷
昭和二十四年八月十日發行
昭和二十四年十月十五日再版

定價 百五拾圓

著者 石田雅子

東京都中央區日本橋茅場町一ノ一八
「中央起業」内

發行者 豐島清史

東京都千代田區内幸町二ノ三

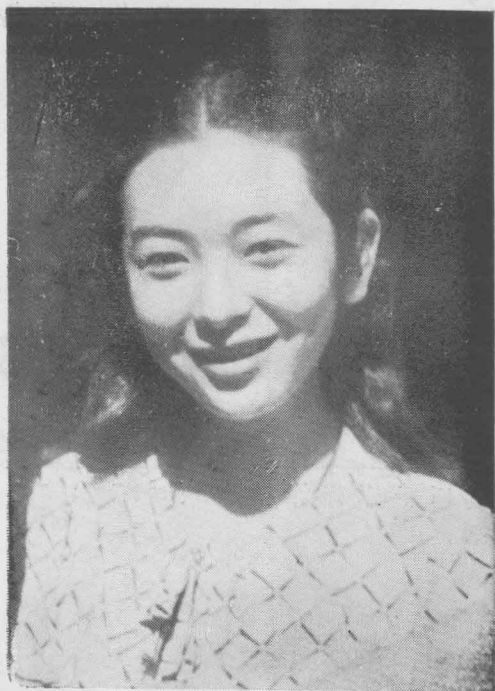
印刷者 羽田政勝

東京都中央區日本橋茅場町一ノ一八「中央起業」内

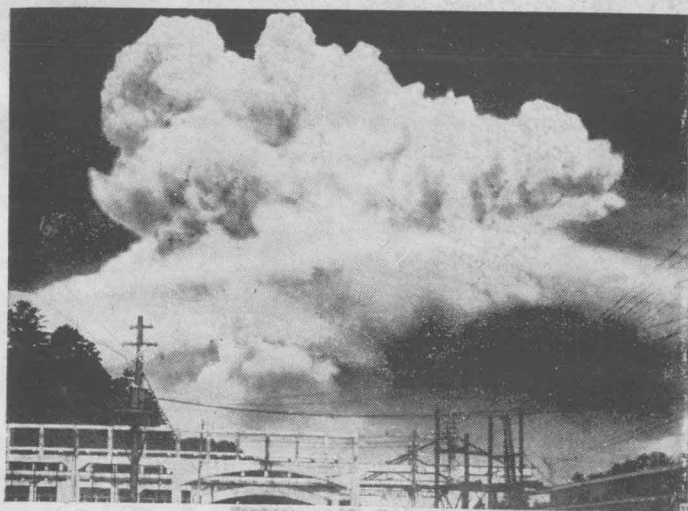
發行所 表 現 社

電話茅場町(36) 七八五〇番番





：私は何気なく時計を見ました。——十二時少し前でした。それから、本當にそれから間もなくでした。あの恐ろしい恐ろしい原子爆弾が投下されたのは。あの「ピカッ！」が起つたのです。あたりが桃色にクワツと熱く光りました。私は思わず目をつむりました。：と語る當時（十五才）の雅子さん



原子爆弾炸裂直後の爆雲
(1945年8月9日午前11時2分)



彫像悲し(天主堂のヨハネとマリヤ像)



一年前の遭難場所に佇んで、
當時を
偲ぶ雅子さん



浦上天主堂廢墟の全景



永井隆博士を見舞う雅子さん

「あの原爆で死んだ人たちは、どんなに叫びたいか知れない。平和のためにね。僕たち生き残つたものは、かれらに代つて、世界に叫んでやる義務があるのだ。ねえ、雅子さん、僕はそう思っていますよ。」

こうした永井先生のおことばは、泉のように次から次と湧き出でてなかなか盡きそうにもない。私は、ひとこともものをいわずに、黙つて先生のおことばにうなづいていった。

雅子斃れず

石田雅子

あなたの本の重版を祝います。一點は方向をきめません。もう一點うつと方向がきまります。その直線上にさらに第三點をうち、第四、第五どうちゆけば、ひとすじの人生行路となりませう。

あたえられた天分をこの方向にふるいなさるよう、おすすめします。

いただいたシヤクヤクを寫生しましたのでさし上げます。表紙にお用いになつてもよろしいです。何にも用いられないのもよろしい

です。

子供たちが學校から歸つてから、くりま
じゆうを、もしやもしやたべました。
子供が何もしやべらず、もしやもしやお
ぼる光景をみるのは父の幸福です。

一九四九年五月十七日

永井

隆

石田雅子様

序にかえて

永井隆

原子雲の下に生き残つたというだけでも、おろそかならぬ君の生命であり、私の生命であつた。原子病の苦しさにうちかち、原子野に生き長らえた一日の生命の歩みはきびしかつた。

そうして今、君の庭に咲いたとて君から贈られたシヤクヤクの花をみる。焼野に芽生え、同じくきびしい生命のいとなみを續けて、ついに今年はこうも美しく咲き出でた花をみる――。

よくぞ生き抜いてきた、花も、君も、私も……………

しみじみと茶を口にして、シャクヤクのういういしい花びらに見入れば——
生きている、私は生きている……という實感が、ぐうつと五體にゆきわたる。
この茶も、あの日吹き拂われた、わが畑のふちの焼株から芽を出し、年を追う
て茂り、こどし始めて摘むほどになつたもの、天地の生氣をこの一葉一葉に吸
い集めたかの如き新茶の香りである。

生きているという事は何ものにも比べられぬほど尊い。原子雲の下の日から
シャクヤクの花咲く今日にいたるまで保つてきた生命であるがゆえに、こうも
尊く思われるのであろうか？——

シャクヤクも苦勞したろう、茶も苦勞したことだろう、そして君も……。私
はやつと生きてきた。

——どんなに苦しくても、どんなに悲しくても、生きてゆく事そのことが重
荷のように辛くても、生きていることにまさる喜びはない。生きておりさえす

れば仕事ができる。この世を美しくする仕事が一――

草でさえ、木でさえ、ほそい生命を生き續けて、荒野を小い花で飾つた。

長崎を國際文化の都市として建設することに國法で定められ、私たち市民はこの街に國際的な平和文化の花を咲かせる仕事をもつことになつた。私たちの仕事は大きい。

しかしその手始めは、原子爆彈の實相を廣く世界中の人々に知らせ、戦争をいやにならせ、戦争を思い止まらせ、平和を永遠に保とうと願わせ、努めさせることである。

世界永遠の平和が約束されなければ、いくら國際文化を作り上げたつて、まるで淺間火山の上に文化住宅を建てるようなもの、戦争の火が噴き出すたびに、こつばみじんにされてしまう。

君は今、この永遠平和の願をこめて、君の尊い原子爆彈體驗記を世におくる。

——あやしい光を放ちながら空を被つた原子雲の下、屍のあいだに生き残つてゐる自分を自覺した君は、そのとき年わずかに十五歳であつた。——十五歳の少女のやわらかい膚は切られて血を噴いた。幼い骨髓は放射線を受けて潰れた。人の世の痛みを知らなかつた心は原子野よりもひどく碎かれていた。——君はその體驗をそのとき直ぐ、十五歳の少女の感覺で書きつけた。

それは新しいカメラで寫したフィルムを、作つたばかりの現像液で仕上げたように、濁りがなく、ひずみが無く、まことに鮮かに、あの原子雲の下の有様を寫し出している。——これが原子力の場の中に、ひとりさらされた人間の眞のすがたであつた。

血の流れる首を黒いカーテンで巻き、片ちんばのげたをはき、火の林の中を、よろよろと逃げてゆく人間——文化人とみずから稱えていた人間も、いつたん原子戦の中にまきこまれると、このような姿をさらすことになる。

……君はしかし、別にこのような説教じみた下心で、この記録をどごめたのではなかつた。あどけなく兄さんにおしやべりする氣で書いたのだつた。それだから、文章は素直で、飾りけがない。したがつて、いよいよ眞に迫つてゐるのである。

ほかの原子爆弾記録に比べて、あの日のむごたらしい現場の、描寫が足りない、と思う人があるかも知れない。しかし、ここにこそ君の記録の正直さがあつた。いや、記録以前の心の美しさがある。情のこまやかさがある、——生きてゐる人間がある。

やさしい心のもちぬしには視るに堪えぬ有様であつたのだ。ああ、死の手につかまれた友の叫び、生きながら燃えゆく友のにおい、目にうつるは既に息絶えた友の黒髪……君は目を伏せ、耳をおさえ、息をつめて、死の谷を逃げまどつた。ともすれば君みずからが黒い死の手につかまえられるやうな、追つた状況

であつたのだ。どうして、のうのうと、ゆうゆうと、冷やかに、あちらを見、こちらを眺め、よい文章の材料はないか、と探すことができるであろうか？

これは正に偽りのない人間の記録である。人の世にすれていない少女であつたからこそ、こう感じ、こう書けた。

君はお父さんの腕に抱かれようとの願ひとすじに火の中を走つた。——いな——もう走れなかつた。原子病のすでに現われた五體は杖をたよりに、よろめき歩むのが、やつこのことであつた。はた目から見ると夢遊病者のようであつたろうが、君は一刻も早くお父さんの廣い胸に救われたいと、競泳のような努力で、放射線の亂れとぶ中を、わき目もふらず泳いでいつた。……その君のすがたを想うと、父と子との相引く力の強さが……………

一九四九年五月十七日

長崎市浦上 如巳堂にて

目次

原爆地寫眞集

永井博士より著者への手紙
序にかえて

永井隆

第一部

運命の日	一九
雅子斃れず	四三
原子との闘い	五三
新生	七五

第二部

あの日より一年	九五
父の贈りもの	九九
芍薬	一〇八
眼を病む	一三三
永井博士を訪ねて	一三〇
深堀少年と平さん	一四三
みどりの長崎	一五五

第三部

——父の思い出——

その日の朝……………	一六
我が子歸らず……………	一六
奇蹟の生還……………	一七
病む頃……………	一八
長崎を離れて……………	一九
爆心地に行く……………	一九

装畫	永井隆
装幀	水島秀男
題字	細郷重三

第
一
部



運命の日

その日、私は朝早くから目がさめました。

何時ものように、白シミーズに白の半袖の運動服を着、お父様のバジヤマのズボンを直したモンペをはきました。お父様が起きて、森田榮子さんに上げるハンカチとおもちやの人形を包んで下さいました。私はそのころ學徒動員で、工場に毎日通つていましたが、森田さんは同じ職場のお友達で、以前、美しいハンカチを贈られたことがありましたので、そのお返しに差上げるつもりでした。私はそれを持つて元氣に下駄ばきで家を出ました。あの恐ろしい出來事が一刻一刻、迫つて來て居たのも知らないで――。

私が工場に着き、しばらくすると警戒警報が出ましたが、いつものことなので、べつだんあらたまつておどろきもしませんでした。そして朝禮の時空襲になり、私達は直ちに山へ待避しました。しばらくすると事もなく空襲は解除になり、私達は廣島の新型爆弾の事を話し合いながら、待避所から出て再び工場へ向いました。

「私の父は運のいゝ人で、もと司法省の會計課長をしていたのよ。それから去年一度廣島に轉任する事になつたの、處がそれが急に取止めになり、春日町に在る東京區裁判所に移つたの。そしたら間もなく司法省が空襲で焼けたのよ。それから長崎へ來る事になり、こちらへ來たら又その區裁判所も焼けてしまつたの。そしてよく夕食の時、父と『廣島も長崎もまだ一つもやられて居ないが、どちらがよかつたかな』と話合つて居たのよ。そしたら、ほら新型爆弾を廣島に落したでしょう。だからとても運がいゝのよ。」

そんなことを友達と話しながら私は工場にはいり、すぐ仕事に取りかゝりました。やるべき仕事が一應終つたので私は立上りました。そしてそろ／＼お腹のすいて来た私は何気なく時計を見ました——十一時少し前でした。

それから、本當にそれから間もなくでした、あの恐ろしい恐ろしい原子爆弾が投下されたのは……。あの「ピカツ！」が起つたのです。あたりが桃色にクワツと熱く光りました。私は思わず目をつむりました。光つてから爆風が起るまでの一秒間、私は工場においてある魚雷でも破裂したのかと思つていたようでした。一體、これが誰が原子爆弾だと思つたでしょうか。あゝ、何と云う恐ろしい事でしょう。私はその瞬間のことを、今考えて見てもはつきりとは思ひ出す事が出来ないのです。とにかく夢中でした。私は爆風に飛ばされて——ピタツと伏せました。それと同時に足の上にザーツと、土か砂かが降りそそぐように何か、積る重さを感じました。

ガラスがごび散るような音、地が割れるような不気味な音、大きな建物がくずれ落ちる音、金属がはげしくぶつかり合う音、——それらが一緒になつて、言葉では言いあらわせない激しい音となつたひととき、私の頭の中は、不思議な真空状態になつていました。

氣が付いて顔を起した時、前に居た組長さんが、鼻から血を流しているのが土煙りをすかして見えました。あたり一面に生臭い血の匂いが漂つています。ふと見ると私の首筋のあたりからは、インクでもこぼす様に止めどもなく血が滴つていました。向うの方で瓊浦高女の生徒が顔に怪我をして、工員さんに黒カーテンで繃帯をして貰つていました。

「あつ！ 私も……！」

私がそう心の中で叫ぶまで少し時間がかかつたようでした。ひどい危険な状態にさらされたとき、人間はかえつて、いつときはぼんやりしているものなの

でしょうか。その時私のすぐ近くでパツと火の手がありました。こわされた工場が燃えはじめたのでした。その火をみて、私のぼんやりした頭がはつきりよみがえつて來ました。

「發火だあーッ！ 女は早く逃げろッ！」

「お前の傷はこれでおさえて行け……！」

「しつかりするんだぞっ！」

男の人のかん高い聲が悲痛なひびきできこえます。その叫びは私に向つて言つているのか、或いは誰えともなく叫ばれているのかわかりませんでした。とつせん私の前に黒いカーテンの布が差出されていました。

私はその黒カーテンをお禮をいう餘裕もなく、ひつたくるように受ると首筋（其の時は首筋を怪我したと思つていました）をしつかり押えて逃げ出しました。叫ぶ聲、わめく聲、あたり一面もう／＼の土煙りです。名前も知らぬ瓊

浦高女の生徒三名許りと、太田さんという女工さん、其の他二、三人の女工さん達と一緒に、私に懸命にかけ出しながら気がつきませんでした。

火は既に八方から燃え上り何處へ逃げてよいやら全く判らなくなつてきました。兎に角建物の崩れ落ちている下に居ては危いので、早く廣いところへ出たのですが、早く早くと思つてもどうする事も出来ません。薄い板の上などを通るとき、バリ／＼踏み抜いて何度も倒れました。

泣く聲、叫ぶ聲、わめく聲、油に火がついたのか轟然たる爆裂音、すべて地獄の責苦かと思われる恐ろしさでした。其の中を私達は、生も死も忘れてた、／＼逃げて行くのでした。

「小父さん、こゝから先どう逃げたらいいですかーつ。」

私は男の人の姿を見ると泣きながらごなりました。私は私一人がこの恐ろしさにあつてゐるような思ひで、誰か助けて下さい！と、どびついて行きたい氣

持でいつばいになつていました。

「よししつ。こゝから眞直ぐ下の方へ行け、職場は？」

「第一仕上げです。」

「よし、早く逃げるんだぞ！」

小父さんに言われた通りに下の方を眞直ぐに進んで行きました。すると先頭に居た太田さんが

「みんなしつかりしてね、出口が分つたわ！」

と大聲で叫んだのでした。私はもう夢中で太田さんに續いて行くと、やがていつも朝禮をして居る運動場へ出ました。然しもうどちらを向いても、天までどゞくばかりに立上る黒煙と共に眞赤に火が燃え上つています。

「ごうしましょう。ごつちへ逃げましょう。」

私達はくるくるまわりながら天を見上げました。其の時後の方で

「向うへ逃げろ。師範の方に早く行け。行かないと火に取圍まれるぞ。下敷になつた者がいつばいいぞ！ 早く行けつ。」

と男の人が叫んだのです。

私達は一散に走り出しました。

然し私の學校のお友達は誰も見當りません。

傷が重くて歩くことさえ出来ない人たちが逃げる途中にいつばいいました。

そのような人達に氣付く程度に現在の自分の情況がはつきりとかめて來たようでした。そして私は走りながら、自分は幸いに輕傷らしいな、などと思つていました。ずつと後の方では血みどろになつて全く動けない人が

「待つてエー、。一緒に逃げてエー、。」

と力を限りに叫んでいるのが聞えます。

私はその悲しげな聲にためらつて立止りました。しかし、その時の私に何が

出來たでしょう。ふと氣がつくとすぐ傍では、歩く勇氣さえない氣の毒な女工さんがびつこをひきながら

「私はどうせ駄目なのです。一人でも多く助かった方がいゝから、私を置いて先に逃げて頂戴！」

と悲愴に叫んでいます。その人はうつろな目をして前方を見ていました。情ない悲しい氣持が泉のようにわいてきて、私はどうしてよいのか判らなくなりましたが、四方から火が近付いて來るので、逃げ遅れるかも知れず、じつとしては居られなくなりました。ほかの人の走るのを見て、私は、亂れた髪を無意識に押えながら、思わず一人で走り出していました。

やがて道が二つに分れる所へ來ました。片方は生の道、片方は死の道と思われて、私は迷い、左の方を二、三步、壊われたトタン板を踏越えて進みました。が、又思い直して引返し、太田さんと一緒になつて、右の方へ走つて行きました。

た。左右はもうくたる火の海なので、熱くて堪らなくなってきました。

「アツ逃道だつ、此處は正門よつ！」

私は思わず叫びました。

門の石の柱だけが低く残つて立っています。側には馬が居てあたりの様子におどろいたのか大暴れに暴れています。火は直ぐ側まで迫つて來ています。暴れ馬と火の間のすきまが一メートル程しかありません、逃げられるかなど考えましたが、もう一瞬のひまもありません。必死でした。私は其の恐ろしい關所を飛び出したのでした。

氣が付いて見ると、もう其の時は、私と太田さんと二人きりになつて居ました。青々と見える何時もの田圃がすっかり燻つて、血の匂いと、何かしら嫌な匂いがまじつてあたりを流れます。山の方からも畠の方からも、勿論工場からも物凄い煙と火が立ちのぼっています。私達は漸く田圃の中に逃込みました。

ほつと息をついて、そつと首筋から手を離しました。もう血は止つた様です。肘や足がヒリ／＼と痛みます。

「石田さん大丈夫？ しつかりね、もう此處まで逃げたのだから大丈夫よ、よかつたわね。私はバイス臺の影に伏せたので、お蔭で少ししか傷を、しなかつたの。」

「よかつたわね、それにしても私なんだか夢みたいだわ。一體どうしたのかわからないわ。」

漸くそれ丈、話が出来たと思うまもなく私達は、又直ぐ逃げ出さなければなりませんでした。周囲から火がだんだんと迫つてくるような氣がして、じつとしてはいられません。

皆の逃げる方へ方へと歩いて行つたのですが、何しろごつちを見ても火に圍まれていゝのです。

「大橋の方もやられて駄目らしい、市内にも随分落したらしぞ。」（私は其の時もまだ普通の爆弾だと思っていました。）

「ごつちへ逃げましょう。」

ここも亂れていますし、あたりの建物などがすべてつぶれてしまつて火につつまれているのですから、方向を見定めることさえ出来ないのです。

私たちは川の中へザブ／＼とはいって行きました。向う岸へ着こうとした時私のはいていた下駄が片一方流れてしまいました。

びつこを引きながら岸へ上ると太田さんも跣足になつていました。

ガラスや板等が一面に散らばつていたので、跣足ではとても歩く事が出来ません。何か履物が落ちていないかと随分探しましたが見つかりません。暫く行くど藁屑の様なものが落ちて居たのでそれを足に巻き付けて行きました。しかしはいてもはいても直ぐ抜けてしまいます。どう／＼それも捨て、跣足で歩い

て行きました。

田の中にも畠の中にも道路にも、全身火傷の者や傷の重い者が、澤山倒れて
います。もう死んでしまつているものもあれば、息づかいの苦しそうな人も居
ます。口から白いアワを吐きながら苦しそくに

「みずー。みずー。」

と叫んでいる人も居ます。歩いて居る人は軽傷者だけなのです。

さあ何處へ逃げようか、と鐵道線路の所へ立つて考えている時、後で

「おいどこか？兵器か？」

「ハイ兵器（三菱兵器製作所のこと）です。」

「どつちへ逃げるのか。」

「今わからないで困つている所です。」

「そうか、道ノ尾の方へ逃げろ。道ノ尾のトンネル工場は残つている。救護

所も出来ている。お前大丈夫か、歩けるか。」

と私の方を向いて男の人が言いました。そこで私達は道ノ尾の方に向つて歩き出しました。

「おい、^{はだし}跣足じゃ危い、下駄を貸してやるぞ。」

私は片一方男の人の下駄を貸して戴いて引きずりながら歩きました。

直ぐ近くにあつた大きなガスタンクは、見事に潰れて、鐵のひしやげた骨組だけになつて居るのです。空に煙が一つばいひろがつて居ました。私はガスタンクの爆發する力を利用して工場を壊わしてしまおうと、ガスタンクを目がけて爆彈を落したのだらう、アメリカは利巧だななどと思ひながら、兵器工場の横を道ノ尾の方に歩いて行きました。兵器工場はすつかりメチャノ〜になつてボン／＼燃上つて居ます。すつかり潰れて居るので何處から逃げ出して來たのかも

判りません。

「兵器は影も形もないじゃないか。」

という男の人の聲が終るか終らないうちに工場の中の何か、破裂したらしく、『ドカーン』という大きな音がしました。

「危いぞ、こりやあ時限爆弾でも使つたのかな、早く早く走つて逃げよう。」
私達は一目散に走りました。もう大分走つた頃、又『ドカーン』という大きな音。

私はだん／＼と足が疲れて來ました。物も言わず早足に歩いて行くぞ、やがて道ノ尾のトンネル工場の所まで來ました。ところがどうした事かトンネル工場の中から人がドン／＼逃げ出して來ます。よく話を聞くと、この後で大爆撃があるそうで、危険だから皆山へ避難するのだという事らしいのです。そこで仕方なしに私達も一緒に走りました。息が苦しい。足が重い。だん／＼と疲れ

が甚しくなり、胸が詰る様に苦しくなつて來ます。目の前がかすんで來ました。太田さんはずつと前の方を走つて居られます。さつきの男の人も何處へ行つたか判りません。

其の時「敵機來襲！」の聲が又も聞えました。私達は直ぐ近くの防空壕の中へ入りました。すると側の人が

「あなたは出血がひどいから、向うの假救護所へ行つていらつしやい。」
「早く應急手當をして貰いなさい。」

としきりにすゝめるので、敵機の退去した後、どうく一人になつて歩き出しました。

途中で、誰か見知らぬ方が

「お前はひどく怪我してるじやないか、ついて行つてやる。」
と親切に言つて一緒に來て下さいました。救護所まで來ますと輕傷者だけが

(重傷者は動けないので燃えている側などに倒れたまゝになつていました)草の上に布團を一枚敷いて、枕を立てて寝ていました。みんなウ、ウ、ウ、ウ、どうなつています。私も布團の上に寝ました。

私の隣では、男の人が知つてゐるらしい女の人をしきりにはげましながら、シャツのボロ切れで傷を押えてあげたり、痛いという手の位置をかえてあげたりしていました。私は首をねじるようにしてそれを見ていました。着ているものはボロボロに破れ、顔や手は汚れ果て、男の人も女の人も體のおちこちにやけどやけがをしているのですが、此の上ないみじめな状態でもかくお互いについてやり合ひ、助け合はるといふことが、私には羨しくてなりません。私は涙ぐんでいました。するごその人は、私には誰も手當をして呉れるものが居ないのに氣付いて、直ぐ一緒に親切に手當を施して下さいました。そして、こゝで私は今迄首筋の傷と思つていたのが、頭の傷ということが判り、傷は輕

くないと知りました。この人は後で平さんという人だとわかりました。

あゝ、天は私を助け給いしか！ 私は赤チンとオキシフルで各所の傷を手當してもらいましたが、まもなくあとからあとからここに來る人たちのためには、一滴の赤チンも一塗のオキシフルもなくなつてしまいました。傷の手當がすむと、私は「ああ生命が助つた」と心の中でつぶやいていました。母の靈が守つて下さつたのだとも思いました。

まもなく又敵機來襲の聲がしました。私達はやつと這入れる小さな木蔭になつて待避しました。頭がだん／＼痛くなつて來る様な氣がします。日當りは傷にいけないというので今度は泥道の木蔭に寝ました。敵機は幾度か上空を過ぎ、其の度に私は今までの苦しかつたことを思いかえすのでした。

だん／＼と日が傾いて來るような氣がして、私の心も暗く、そして心細くなつて來るのです。側に居る平さんが「神風」の團扇で靜かに私をおおいで呉れ

ました。

「今三時半頃」

ご平さんの聲がします。私は東京から来て間もないので、道ノ尾の附近もまたこの邊りの方角さえも知らないのです。あゝ、何時になつたらお父様に會えることか、これから先、知つた人も居ないし、どうすればよいのかと私の心細い氣持はだんだんと深くなるばかりでした。やがて何處から入つた情報が、勝山町は無事であるということを知りました。平さんは私に向つて

「大丈夫、貴女のお父さんやお母さんは、きつと無事でいるよ。心配してはいけない。眠つちや風邪ひくからいけないよ。傷は大した事はない。安心しろよ。」

とまるでお兄様の様にやさしく慰めて下さるのでした。私が

「私の母はもう居りません。」

と言うと、平さんは一層聲を和らげて

「そうか。それじゃあ、お父さん一人で、どんなにか心配して居られること
だらうね。よし僕がきつと貴女のお父さんに無事であることを知らせて上げよ
う。」

と言われるのでした。

あたりが、だん／＼薄暗くなつて來た頃、誰いうとなく

「こんな處で、治療してもらへるのを待つていたところで、何時になるこ
とやら判らない、いさばや諫早の海軍病院へ行こう。」

ということになりました。

「立てるか、歩けるか？」

平さんにそう言われて私はフラフラするのをじつとこらえて立上り、女の方
に縋つてそろりそろりと歩き出しました。その時下駄ははいていませんでした。

道にはガラスが一杯で、普通の時でしたら靴をはいていても恐ろしいような處ですが、私は仕方なく跣足はだしのまままで歩いて行つたのです。其の時、既に右足は何か踏抜いたらしく、ズキンズキンと痛んでいました。道ノ尾の驛に向う途中又爆音が聞え、私は大きな木の蔭に身を隠しました。

やがて道ノ尾の驛に着くと、ホームにレールが澤山積んである上に、十二、三歳位の男の子が裸で腰かけてふるえていました。よく見ると全身を火傷しているのです。

「さあ、君も一緒に行きよう。」

親切な平さんはその男の子に聲をかけました。チラと私たちの方を見て、泣き出しそうな顔になると、その男の子はそうそうとレールの山を降りてきました。火傷が痛むらしく、顔はしかめていますが、目の輝きには、嬉しさがありありとあらわれていました。悲惨な氣持の時に、自分一人きりだと思ふとどて

もたまらないものだということが、よくわかつていた私には、この男の子の目の光がとても印象に残りました。

「これからどうするのですか。」

と私が聞くと、平さんは

「諫早の方から汽車が来るからそれに乗り、一旦大橋の所まで行つて、其處で重傷者を乗せて又道ノ尾に引返し、それから諫早に行くのだ。」

とおつしやいました。やがて汽車が來ました。輕傷者丈残して重傷者は全部乗りました。私も平さんも、平さんの助けた小さな男の子も乗込みました。その子は深堀さんと言つて長崎商業の一年生、お家は飽あ浦だということでした。

汽車の中ではみんなが盛に吐いて居るのです。同じ様な音を立てながらそして苦しうに水みたいなものばかり吐くのです。汽車が走り出すと間もなく、私も氣持が悪くなつてお腹からグウツとこみ上げて來ました。私は吐こうと思

つて窓から首を出して居ましたが、どうく出ませんでした。大橋まで來ると、私達の工場の三菱兵器は勿論のこと、山の中や市内の方まで黒煙を上げて燃えているのが見えました。大橋で、平さんは汽車の中に一人の海軍さんを連れて來て

「この人になんでもして貰いなさい。僕はこれから君達のお父さんやお母さんに、君達が無事だと言う事を知らせて來るからね、あなたは勝山の裁判所官舎だつたね。」

と私の方を向いて平さんはこうおつしやいました。そして

「さようなら、元氣で。」

という聲を残して、平さんは暗闇の中に消えて行かれました。

雅子斃れず

もうあたりは眞暗になり、燃上る火焰だけが恐ろしく眞赤に立上つていました。立つて眺めると、浦上驛の方向も、浦上天主堂の方も、私たちが仕事をしていた三菱兵器の工場も、みんな火が燃えているのです。夜のためによい大きくも明るくも見えましたが、なんだかすべてがおしまいになるのではないかしら、という氣持をぬぐい去ることが出来ないのです。大橋では僅かばかりの兵隊と巡査が重傷者を汽車に乗せ始めました。負傷して倒れた人たちが、草の上に寝たままで、泣いたり、叫んだり、うめいたり、吐いたりしていました。誰よりも先に自分が汽車に乗せて貰おうとして、私の前をうわ言のように意味

のわからぬ言葉をわめきながらよろめいて行く人もいました。もうその時私は可哀想と思う心も、氣の毒と思う心もすつかり忘れているようでした。海軍さんの指揮で私たちが乗り終えるご、汽車は眞暗い中を道ノ尾に向つて出發しました。平さんがいつたように、また引つ返して諫早まで行くことと私は思つていましたが、道ノ尾についてから海軍さんは、

「今から諫早へ行つても、もう治療はして呉れないから、トンネル壕へ行つて寢よう。」

と言われました。海軍さんに従つて私たちは道ノ尾で汽車を降りました。

汽車から降り、一步一步ゆつくりと歩きました。右足の裏がズキズキと痛みます。私は海軍さんに凭れて足を引きずつて歩きました。そのころから深堀さんが苦しそうな聲を出し乍ら「水。水。」と言いはじめました。海軍さんは深堀さんに水を飲ませてやりました。もう一人の知らない女の人も水をもらつ

て飲んでいましたが、私はじつと我慢しました。そこでも道の兩側の草の上に人々が夜露に濡れながら寝ているのでした。

やがてトンネル壕まで来ました。私達は中に這入りました。中では朝鮮の人が五六人、細いローソクの火をともしていました。海軍さんは壕内のトロツコのレールの上に張板の様な板を三枚並べてくれました。そして私は一番出口に近い方に寝、其の次に深堀さん、次に女の人の順序に並んで寝ました。朝鮮人の中の二人と深堀さんが苦しそうにうめくのです。はじめの中はローソクの光で少しは良かったのですが、又爆音が聞えて来たのでローソクも消してしまいました。私の頭の邊に壕の上から水がポツン／＼と落ちて来るので冷たくてなりませんでした。深堀さんは寒い寒いと云つて困るので、海軍さんは自分の着ている上着をぬいで深堀さんに着せました。今度は海軍さんが裸體になつたので暗闇でクシャンクシャンとくしやみを始めました。深堀さんはそれでも寒い

寒いと言いました。海軍さんは外へ出て夜露にしめつた蕙を持って来てかけてやりました。深堀さんはそれでも寒い寒いと言っています。海軍さんは朝鮮人から薄い小さな座布団を借りて板の上に敷き、其の上に深堀さんを寝かしました。深堀さんはそれでも寒い寒いと言つて泣いていたのです。

夜の十時頃でしたでしょうか。海軍さんは私達に固パンを一つ宛持つて来て呉れました。私はそれを頂きましたが、おいしい等とは勿論思えず、むしろ氣持が悪くなつたように思いました。深堀さんは「水ー、水ー。」としきりにせがみます。朝鮮人のおばあさんが少しばかりしかない水を恵んでやりました。飲んでしまうと又寝ましたが、五分も立たぬ中に又「水ー、水ー。」と叫ぶのです。おばあさんは又水を深堀さんにやりました。こんな事を何べんも繰返している中に、おばあさんはどう／＼怒つてしまいました。そして

「もう水はないよ。」

と、ごなりつけました。

「汲んで来なきやないよ。」と言うと

「僕が汲んで来ます、水は呉れんですか。」

と泣きながら深堀さんは言うのです。

「水は呉れんですか……水は呉れんですか……水は呉れんですか……」

と自分で言っている言葉も自分で知らぬように、そう繰り返しているうちに、深堀さんの聲は、だんだんかすれてきました。おばあさんはもう返事もしません。

私は寝ていて深堀さんやおばあさんの聲をききながら、ぼんやりといろいろなことを考えていました。人間は、こんな、普通でない状態におかれると、思わず涙がこぼれるような暖い心を示したり、ふだんは飾っている利己的な氣持やわがままな感情を、そつくり見せてしまうものだ。——こんなことを考える

頭の中に、父や兄や親しい人たちの顔も浮んでは消えて行きました。平さんが連絡してくれるといつたけれども、家の人に若しものことがあつたのではないだろうか。みんな無事なら無事で私のことをどんなにか心配していることだろう。——隣りで深堀さんが苦しうにうめきながら體を動かします。私は、深堀さんが動く度に腕のところに何か冷いべたつくものを感じて、おや、と思いました。氣持が悪いので注意していると、それは深堀さんの肌がふれるためなものでした。深堀さんは、ひどい火傷をしているうえに、裸だつたものですからその傷口がぬれていて、動くたびに私の腕に觸れるのです。そこで私はなるべく深堀さんから離れる工夫をしました。が、せまい板の上ですから、私は板には體半分しか乗せられず、後は宙に浮かしておくより外に途がありませんでした。夜が更けるにつれて、私の體も冷たくなつて來るのです。血で染つたゴワ／＼のシャツに半袖の上衣。我慢しようと思つても、どうしてもふるえて來

るのでした。私は「寒い〜」と小聲で叫び続けました。若し誰かこの聲を聞いたら何か掛けを呉れはしまいかと——けれども何度叫んでも掛けて呉れる人等はありませんでした。

そして何度も入口の方がもう明るくなつていないかと思ました。いくら待つても夜は明けていません。其の中急に深堀さんは夢にうなされたような聲で

「○○さん(弟さんか誰かの名前なのでしょう)行こう、一緒に行こう。」と叫び出したのでした。其の聲は冥途の入口としか思えませんでした。言う度に聲がだん／＼細くなり、呼吸が小さくなつて行くようでした。

私はお父様のお顔を思い浮べました。亡きお母様をも思い出しました。お兄様や妹達の姿が見えるようでした。大隅(東京のお友達)さんや、康子(東京の従妹)ちゃん達の聲が聞えた様でした。あの、ピカツの時からかなり時間がたつているだけに、私の頭の中はだんだんといろいろなことがかけめぐりはじ

めて苦しくなつてきました。けれども、さすがに疲れが出たのか、私も何時の間にか夢路を辿つていたのでした。

眞夜中ハツと目覺めた時、地響きがして居ました。海軍さんの聲が耳元で響きました。

「今この山の裏へ爆弾を落したぞ。」
其の聲もうすら／＼に私は又眠つてしまいました。

「姉さん／＼、早く病院に行こう。」
夢の中から私を起す深堀さんの叫び聲に目を覺ますと、あたりはもう明るくなつて居ました。深堀さんは

「姉さん、早く諫早に行こう。」と言いました。

「え、行きましようね。」

私も立上りました。海軍さんは裸體はだかの深堀さんにセメントを入れる紙の袋を着せてやりました。私は穴から外へ出ました。外は氣持の悪い程暖く感じました。朝鮮人のおじいさんが私に御飯をすゝめました。私はむか〜して食べた。私もありませんでした。

「今食べて元氣をつけておかないと、何時食べられるか分らないよ。」

と親切に言われて、貰うには貰いましたが、それは小さな新聞紙の端切れにポロ／＼の麥御飯がのせてあるばかりのもので、勿論お菜はありません。箸もないので、そのまゝ口をもつていつて頂きました。深堀さんも貰つて食べましたがすぐに吐いてしまいました。

暫くすると、其のおじいさんを知つた、縣廳に勤めているらしい人が來ました。私は何もすることがなかつたので、何氣なく話して居られるのを側で聞い

ていました。そして今度のはどうやら廣島に使用された新型爆弾と同じ物らしいと言う事が判りました。其の方は私に向つて、家の在り場所や、これからどうするつもりか等と尋ねました。そして

「あなたの家は勝山なら助つているから、諫早に行くよりも一刻も早く家に歸つて親を安心させるが良い。」と言われました。そして

「私が稻佐橋迄歸るから一緒に歸ろう。」

とおつしやいました。私は諫早にゆくか、家にかえるかどつちにしてよいか一寸迷いましたが、結局一刻も早くお父様を安心させて上げようと考え、其の方と一緒に歸ることに決めました。其のことを其の方に言うど、その方は

「そうだ縣廳や裁判所の邊りは全焼したが、あなたの所は大丈夫だ。早く歸つた方がよいだろう。」

と立上りながら言われた時、私は思わず

「えつ、裁判所も！」

と叫びました。

「大丈夫か、歸れるかな。」

親のような親切な言葉に私は傷の痛さも忘れて

「大丈夫です、きつと歸ります。」

と答えずには居られませんでした。そしてびつこを引きながら元氣よく歩き出しました。然しなんと言つても跣足では痛くてとても家まで歩いて歸る事は出来そうにもありません。けれども裁判所全焼の責任感と共に、ひそかに涙をのんで私の消息を心配して居られるお父様の姿を思い浮べると、私はガラスや板の粉の上を跣足で歩いて行くのをじつと我慢しました。

「何くそ、これ位のこと泣き出してどうするか。」

私は奥齒をかみしめながら、それでもそろり、そろりと歩き出しました。

「お、跣足じゃあないか！」

その男の方がびつくりしておつしやいました。そして

「危いな、待てよ。」と一問許り左先に捨て、あつた前鼻緒の切れた汚い片方の草履を取り上げ、草ですげて下さいました。それを右足につ、かけて又歩いて行きました。鐵道線路の處へ出ると未だ兵器の工場がボン／＼火を吹いて燃えているのが見えました。後から來る人も、前を行く人も、すれ違つて行く人も、みんな血まみれ、泥まみれの人はかりでありました。私も其の中の一人であつたのです。頭髮はといえはポー／＼になつた上、灰で白くなり、洗濯して間もない純白の運動服やシミーズは勿論、薄い水色に銀色ボタンのモンペまでが、ごす黒い血で染まり、手からも足からもいたる所から血が滲み出ているのでした。

歩いて行く中に又敵機の爆音が聞え、一度目は枝の繁つた木と木の間に、二

度目は側の草ボコの蔭に、この惨めな姿を隠したのでした。だん／＼と、兵器（三菱兵器製作工場）に近づいて來ると、線路の兩側に倒れて居る死體や、全身火傷で水ぶくれした裸體の哀れな工員達が多くなつて來るのでした。助けて呉れ／＼どうなつている人々もありました。水、水、どうめいている人もありました。兵器は未だ盛んに燃え續けていました。

「疲れるから杖について行きなさい。」

男の方はそう言つて落ちていた棒を私に下さいましたが、私は

「い、え杖など要りません。杖はなくても歩けます。」

と答えました。

「いや、必らず疲れる。足に力を入れない様にして、杖にすがつて歩きなさい。こんな時だから、こんなことで長く歩かねばならぬかわからないから。」

とやさしくすゝめて下さるので、私は要らないとは思いましたがそれをつい

て行きました。

大橋の川まで來ると鐵橋が見事に落ち、もう線路を傳つて行くことは出來ませんでした。仕方なしに、未だ燃えている家の崩れた所を踏越えて、何時も歩いて通つていた大通りを歩きました。その頃から無残にも眞黒に焦げち、れた死體や馬などの口から何か吐いて倒れている憐れな姿を見る様になりました。電線などは影も形もありません。川の中に大勢の人が飛込んだのでしよう、着物を着た女の人や、ゲートル穿きの男の人の死體、馬車までが大きな川を埋めていました。私は見る事も出來ませんでした。だんだん行く中に黒くち、れた死體が一米置き位に横たわつている様になりました。私は氣の毒というよりも氣持悪さにじつと下を向いて行きましたが、いくら下を向いても親子が抱き合つて其の儘焦げち、れている死體や、苦しそうにうつぶせたま、死んでいる人などがどうしても見えてしまうのでした。胸がムカ／＼して氣持が悪くなつ

て來ます。下を向いて物も言わずに歩いて行きましたが、嫌な臭がけむい煙と共に私の鼻をつき、氣持悪さが益々増して來るのです。

死體の數がだん／＼少くなつて來た頃、顔を起すと、もう浦上^{うらがみ}まで來ていました。今や東洋一を誇るあの有名な浦上の天主堂がボン／＼火を吐いて燃上つているではありませんか。死體は少くなつたのですが、今度は全身火傷の者ばかりが道に倒れて何かうめいているのでした。

あゝ何と悲惨な光景でありましょう。

やがて倒れた電信柱に切れ切れの電線がひつか、つていゝのを見かけるようになつて來ると、もうこの御恩を受けた男の方もお別れしなければならぬことになりました。稻佐橋に來たのです。けれど其の方は其處で唯「サヨナラ」と別れてしまうような方ではありませんでした。先ず別れる前に、今迄何回となく拾つては換えた片チンバの焦げた草履を其處でもう一度替え、緒を針金で

上げて穿き替えさせて下さいました。そして、その時は、もう先の方が眞黒に焦げていた杖を捨て、又強そうな棒を渡して下さいました。それだけではありません。側を通る人を呼止めて長崎驛の方へ行く人が居ないか尋ねて下さいました。始めの中はどの人も行かないと答えました。けれども何人か聞いて行く中に、一人の男の方が丸山の方へ行くとおつしやつたので、其の方に、驛迄連れて行つて下さるようにと、私のことを頼むのでした。

私は親切な男の方によく、お禮を言つてから、この丸山の方へ行く方と一緒にガラスの粉のちらばつた上を、我が家へと向いました。私はもうひどく疲れが出て来て、一步一步あるく度に足が重く、踏み抜いた右足の裏がすく／＼と痛みを増して来るのでした。けれど私は我慢しました。やがて骨ばかりになつた長崎驛の前まで来ると、今度こそ一人で行かねばならなくなりました。丸

山へ行く方にも別れを告げて、火の粉の降つて来るだらう、坂を進んで行きま
した。

あゝこの時杖が無かつたら私は我が家へ歸り着く事が出来ず、途中で倒れて
しまつたかもしれません。

私の體はすつかり疲れ切つて、たゞ杖のみにすがつてこの坂道を上つて行く
のでした。

何時も青い大空は火事の煙でどんよりとしていました。道の兩側の僅か残つ
た家はどれもこれも皆ガラスや瓦のないゆがんだ家ばかりでした。そして私の
姿もどんなにか、みにくいものであつたでしょう。

勝山國民學校が見えます。もう直ぐです。けれど私の疲れ切つた重い足は、
夢の中で悪者に追いかけられた時の様に、早めようとしても早める事が出来ま
せんでした。懐しい官舎が見えました。私の胸は躍りました。そして足は遅く

とも心丈けは飛ぶ様に官舎の前に立ちました。

すつかりメチャメチャになつた勝山町の官舎に誰も居ない事が判ると、私はガツカリして力を落してしまいました。が再び元氣をふるい起すと、今度は八百屋町の官舎へと重い足を無理に引きずつて行きました。直ぐそこなので氣は焦つていますが、足は疲れ果て、どうしても思うように動きません。

我が家の門です。門、門……まがいてもない我が家の門です。門の扉に何か白墨で字が書いてあります。そしてそれはまがいてもないお父様の字でした。

雅子

無事 火が治まつたら裁判所焼跡に來い 十日

それを讀み終えると同時に私は、荒れた玄關前の庭に林先生の姿をはつきりと見ました。(林先生は妹の家庭教師として、東京から一緒に來られた方です。)

「先生っ！」

「アツ雅子さん！」

二人の聲がぶつかると同時に、私は思わずワツと泣き出してしまいました。

私は「泣いてもいい、泣いてもいい」と心に思いました。そして先生を抱き合つたまゝ泣きながら、そしてチンバの草履を穿いたまゝで一面にガラスの破片の積つた家の中へ入りました。家に入るなり

「お父様は……お父様は？ 何處？ 何處にいらつしやるの。」

私は傷の痛みも忘れて尋ねました。

「大丈夫。お父様はお元氣よ。お役所にいらつしやるけれど、すぐ歸つていらつしやるわよ。」

林先生も頬を傳つて落ちる涙を押えながら、私を臺所に連れて行き、ガラスの破片の散つた上り口の處に座布団を敷いて、私を掛けさせて下さいました。其の上にすわると急に今迄の疲れが出てガツカリしたのか、胸が氣持悪くなつ

て今にも吐きぞうになりました。其の氣持悪さをこらえながら林先生に洋服を着換えさせて頂きました。そしてオキシフルと赤チンで丁寧に傷の手當をし、繃帯でぐる／＼巻いて頂きました。手當をすると安心して我にかえつたのか、手足のかすり傷が非常にひどく痛み出しました。けれど一番大きな頭の傷は少しも痛みませんでした。

其の時、外にお父様の聲がしたのです。

お父様はつぶやくように「いま歸つた」といいながらうつむいてはいつてきました。そして顔をあげて、ふと私を御覽になりました。お父様にも私にもこの瞬間ほど尊い、感動の深い時があつたでしょうか。

「お父様つ！ お父様つ！」

私は思わず知らず叫びました。

「お、雅子！」

私よりも先にお父様は臺所の方につかつかと走りよつて來ました。

「お父様っ！」

私はすべてを忘れてもう一度叫ぶと、どびかかるようにお父様の胸にすがりついで行きました。

夢ではありませんでした。現實でした。

あの世ではありませんでした。この世でした。

「雅子。雅子。」

とたゞ震えながら言われるお父様の聲も本當のお父様の聲だったので。

原子ごの闘い

官舎に歸つた其の日の夕方、お父様、私、林先生、先生のお母さんの一家は數名のお役所の方のおすゝめで田上の鍊成道場に立退いて行きました。

竹藪に圍まれた田上の家に夕闇が迫つたころ、笹の葉越しに美しい月が光つていました。地上ではこんな怖ろしいことがあつたのに、何事も知らないやうな月の光が――。

電氣もつかぬ暗い部屋の間で、食欲の全く無くなつていた私はお父様の膝を枕にして、皆の食事をよそに一人すやくと眠つて居りました。

翌十一日には田上の養生園（病院）の蒔本院長先生の所に傷を見せに参りま

した。空襲が頻繁である上、警報のサイレンが鳴らないので、爆音が聞える度に何回も直ぐ防空壕に走らなければなりません。元氣な人でさえも苦になる防空壕行が私には倍も倍もに苦しく思えました。觸ると痛い頭の傷に防空頭巾はかぶれず、右足の傷は痛くて早く走れず、それでなくても何となく苦しく、胸がムカムカとするのに、未だ暖まりもしない布團から起上つて、何度も何度も防空壕にはいることは容易なことではありませんでした。

二日間も食べていないので、元氣もなくふら／＼するばかりでした。

其の日の晝食に、はじめて鹽辛い小さなおにぎりを一つと、大きな梅干を三つ頂きました。それ以上は頂けません。梅干がとてもおいしかったので、一ツ頂く筈でしたのを三ツも頂いてしまつたのです。ところが後になると喉が渴いて／＼堪らなくなりました。何度でも何度でも水を飲みました。飲んでも／＼喉は渴き、しまいには林先生に叱られてしまいました。でも我慢がしきれ

ず、又飲んでしまいました。

其の次の日、朝起きると、何時も觸りさえしなければ何ともなかつた頭の傷が、觸らなくともズキン／＼と痛み、それが又非常に激しいのです。そして用たしに行くのにも起きるのが辛いのでした。だん／＼とその痛みが前にも増して來るのです。そして首筋の所が固まつてしまつた様にゴリ／＼が出來、起き上る時に、手をついたり首を曲げたりすると、痛くて堪らないようになりました。其處で蒔本先生に往診に來て頂くことにしました。

お父様が市内に下つておしまいになつた後も、益々痛みが激しく、今度は異様な寒氣を感じて來る様になりました。私は、あのトンネルの中で深堀さんが、「寒いよウ、寒いよウ」と泣いていたのを思い出しました。澤山布圍をかけて貰いましたが、布圍をかける暑いのです。林先生が、熱があるのだろうとお

つしやつて、熱を計つて下さいました。其の時は三十八度位でしたが、先生が往診に見えた時には四十度近くの熱がありました。その上食欲が一寸も進まないのです。先生は

「頭の傷の毒をリン巴腺で止めているのです。それに、痛みを感じる様になつたのは、だんだんと治つて来た證據ですから安心なさい。今度の爆彈の被害者は皆共通點があつて食欲がなくなるのです。どうも毒ガスが混つているらしいようです」

とおつしやつて、痛い注射をやつて下さいました。けれど私は、そんなお話も耳にはいりませんでした。たゞズクズクと痛む傷の痛さに我慢が出来なくなり、一人で涙を流していたのでした。自分の生命があるのか無いのかも認識することが出来ませんでした。

「爆音！」

という聲に、私はハッと我にかえりました。けれ共、私には起上る力がありませんでした。

「もう死のう。死んでしまつたら何も苦しむ事はない。もう死のう。」

と私は思いましたが、又其の場で考え直しました。

「今死んではいけない。いくら苦しくても、くじ挫けてはいけない。力の限り頑張る！ お母様見ていて下さい。私は今こそこんなに苦しんで居ますが、きつと今に尊い生命を取り戻します。私の生命は、たゞ自分一個の生命ではありません。今にきつと病の敵に打克つて、丈夫な體になります。」

と誓つたのでした。けれ共やつぱり痛さはこらえる事が出来ません。起き上つて防空壕へ行くことも出来ないようになりました。

だん／＼と時がたつにつれて、痛みが甚だしくなり、私は

「痛い、痛い。」

と泣いていました。奥歯をかみしめても、手を握つても涙が出て來ました。

林先生が

「外傷丈でそんなに意氣地がない事じや駄目よ。もう少し、元氣を出しなさいよ。少し大げさなんでしょう。」

「とおつしやいましたが、私は本當に痛くて――元氣も何もあつたものではありませんでした。やがて、薄暗い闇があたりを包み、ほの暗いローソクが灯ともりました。私は泣き續けていました。枕も布團も手拭もみんな涙に濡れていました。お父様は未だ歸つていらつしやいませでした。私は泣きながら、お父様のお歸りを待つていました。」

其の夜、お役所の仕事で何時ものように遅くなり、暗くなつた中を雅子はごうしているかど心を痛めながら、息せき切つて一里の山坂を登つて來られたお父様は、ローソクのもどで冷たくなつた南瓜の煮付けで食事をすませると、直

ぐ私の所へ来て下さいました。そして未だ痛みが止らずに苦しんでいる私の肩や首を静かにもんで下さいました。お便所へ行くのにもついて来て下さいました。そして私に軽い羽根布團をお父様の分も取つてかけて下さいました。

「さあお父さんが肩を揉んで上げるから、早く寝なさいね。」

そう言つてお父様は今迄の工場生活で幾分張つた私の肩を、やさしく／＼さすつて下さいました。

私は氣持が良いので傷の痛みもうすらいで來ました。そして其の氣持良さに私は何時の間にか夢の國へ誘われているのでした。

夜中目が覺めた時、お父様は、未だ眠ろうともなさらずに、私をさすつていらつしやつたのでした。私の傷の痛みを少しでも忘れさせてしまうように、お父様は晝間の疲れものともせず、夜も眠らずに一心に私をさすつて居て下さつたのでした。私は涙が出ました。今度は痛くて泣いたのではありません。お

父様が有難くて／＼堪らなかつたからでした。

八月十五日。もうあたりは眞暗でした。然し昨日あたりから、つく様になつた五燭の電燈をつけたので、もう蚊帳の吊られた八畳の部屋は幾分明るくなつていました。

新型爆弾は恐ろしい原子爆弾で、大變な強い力をもつているということは新聞で判りましたが、眞暗な竹藪から見下す浦上附近の工場地帯はまだまだ燃え續けて居り、市内には死體を焼く無数の煙が立上つておりました。

三日前から出た熱が未だすつかり治まらない私は、床の中で今日には特にお父様の歸りを待ちわびながら今日あつた出來事を思い出して見ました。

お晝前丁度十時頃だつたでしょうか、近所の人が

「さつきあそこを通りかゝつたら一人の兵隊が高い石の上に立つて『日本は無條件降伏した』と言つていましたが、馬鹿なことを言うもんですね。』」

と言っていました。それから間もなくお役所の有浦さんが林先生の所に何かお父様からの書付けを持つていらつしやいました。林先生が中を御覧になると「正午から重大な放送がありますから、誰でもいいからラジオを聞いていて下さい」

と書いてありました。一體何事だろうと一人の方に正午のラジオを聞きに行つていたゞきました。その話によると

「天皇陛下の御みずからの御放送であつたこと、御放送の内容は、ラジオがガーガー言つてはつきり判らなかつたが、どうやら休戦になつたらしいということ。」

が判りました。そう言えばどうしたことか今日は朝から一度も爆音が聞えないのでした。

然し私は休戦になつたなどということはどうしても信じられませんでした。

それで今日は特にお父様の歸りを待つて居たのでしたが、お父様はどうしたことか、何時も歸る時刻になつても歸つてはいらつしやいませんでした。

「きつと休戦は本當のことなのでしよう。」

と林先生は言われましたが私はどうしても信じる事が出来ませんでした。

翌朝目が覺めた私はもう先に起きて着物を着替えて居られるお父様に向つてだしぬけに昨日のことを聞いてみました。

私の信じていた事はやはりすつかり間違つていたのでした。

戦は遂に敗れたのであります。……………

其の後私は解熱劑の注射をすると、暫らくは微熱も續きましたが、だんぐと食欲も出、どうく二十九日には再び市内の八百屋町官舎へと、重い荷物を背負つて山を下つたのでした。けれど官舎はすつかり荒れた儘でありました。

天井が破れて、空の見える室もあり、奥の室まで下駄ばきで通らなければならず、臺所では雨がはげしく降ると、雨傘をさし、長靴をはいて炊事をするという有様でした。

明けて三十日の朝には福岡から千代子叔母様と嘉一よしかずさんが私のお見舞にお見えになりました。私は其の時はもう元氣に長崎驛までお迎えに出たのでした。

ところが其の後二日ばかり経つと、どうした事か、坐つていて急に立つた時などに目まいがしたり、大層疲勞を覺えたりするのです。それがどうもおかしいと言うわけで、九月七日に血球數の検査をしたのです。

普通の人なら六〇〇〇から八〇〇〇はなければならぬという白血球が、一八五〇しかないと聞いて、私は氣が遠くなつた様な氣がしました。其の日おろしたばかりの赤い鼻緒の下駄も急に映えなくなつたように思いました。さあ大變だ、生命が危いと言うので、今迄安心して居られたお父様もびつくりして、

翌日早速私は叔母様達と一緒に長崎を發つて福岡に向つたのでした。

新 生

福岡の石田家野間山莊に立退いて後、土地が變つたせいか、長崎で惱みの種であつた目まいもなくなり、血色もよくなつて、野間の家族は一同喜んで居りました。そして原子爆彈の症狀にはビタミンCの最も多い柿の葉を食べるといふ、ごいので、毎日少しでも多くいたゞけるようにと、苦心して作つてくれた叔母様のお手製の柿の葉團子をいたゞいたりして居りました。其の上毎朝生卵を私にだけ食べさせていたゞいて居りました。

九月十五日。其の日私は、自慢の桃色の麻の洋服に、紫色のモンペと装いを凝らして叔母様と一緒に元氣に外へ出ました。大空は碧く、何處までも澄み渡

つていました。これがあの恐ろしい原子爆弾を積んだB 29が飛んで来た大空と
はどうしても思えませんでした。私は何かしら嬉しさを胸に抱きながら叔母様
と一緒に歩き出しました。帝大に血球數を計りに行くのです。私はきつと長崎
の時より殖えていると思えました。こんなに氣分が良いのに殖えないわけはな
いと思つていたのでした。

然し豫想は全く裏切られました。白血球數は更に一六〇〇に減つていたので
した。私は其の時、口にこそ出しませんでしたが、今や優しいお父様やお兄様、
愛らしい泰世や靜子を後に残し母の後を追つて、あの世へ去つて行かなければ
ならないのではないかと考えて見るのでした。そして二十日には野間の小母
さんと二人で、混んだ急行電車にゆられて九州帝大附屬病院澤田内科に入院し
たのでした。

病室は一人部屋で二方を壁に、二方を廊下にめぐらした明るい感じの良い部

屋でした。私は其の部屋が好きでした。一番奥の部屋なので人通りがなく、自分の思うがままに廊下を往き來出来るのでした。その廊下のガラス窓から外を眺めると、右手に見える箱崎八幡宮の白い大きな鳥居から、すつと續く松林の先に、穏やかに波打つ海が白く美しく光つて見えるのでした。

私は其の病室で子供のように面白い林という先生の受持となり、優しい石田さんや、田口さん等という看護婦さんにお世話になりました。又この病室では野間のおそ、小母さんに毎日の御馳走をおいしく賄ってもらいました。美しい海を眺めながら血球の缺乏もすつかり忘れて、小母さんと二人で、靜かに楽しい病院生活を一日々々と送つていたのでした。

今になつて見れば命の恩人ともいうべき境挺三（千代子叔母の義弟）さんの尊い血を頂いたのもこの部屋でした。

其の日、私は丁度福岡に出張中のお父様と久振りに會えた外に挺三さんもらつしやつたので、大變嬉しく思いました。ところが話を聞くと私は輸血をするということなのです。輸血と聞いただけで私はびつくりしました。そんなに私の病氣がひどいのかしら――。

間もなく、挺三さんは、唇をしつかり合わせて右手をおさえて歸つて來られました。ドス黒い血のはいつた大きな注射器を持つた林先生、白帽子に白い服白い靴下をはいた石田看護婦さんが續いて這入つて來られました。

私は、それを見てドキンとしました。そして更にもう一度、ドキンとしました。何故ならばその大きな注射器に、太い／＼今迄に見た事のないそれは／＼太い針が差してあつたのですもの。然しそれは挺三さんに刺した針でした。私に刺すのは細いものでした。後から考えるとあんな太い針を刺された挺三さんはどんなに痛かつただろうと思いましたが、其の時はそんな事はそつちのけで

した。左にお父様と小母さん。右に林先生と石田さん。私はお父様の手につかまつて左を向き目をつぶりました。プツと小さな音がしてチクツと痛みを感じましたが針が這入つてしまうと、なんでもありませんでした。目を開くとお父様が

「痛いか、少しは。」

とおつしやいます。

「いゝえ一寸も。」

と私は答えました。

注射は大變長くかゝりました。其の日は夕方、血が体に廻つて、お酒に酔つたように眞赤になり、ふらふらしました。熱が三十八度迄上つていました。

楽しい病院生活は續きました。白血球も計る毎に數を増しカルテの赤と青の線が次第に低くなつて來るのです。

せめて病院に居る間丈けでも榮養をどうと私は毎日お腹一杯御馳走をいた

いただきました。

おすし、味御飯、栗御飯、小豆御飯、いため御飯等を始め、おしる粉、てんぷら、ふかしパンに雪印のバター、てつくわ味噌、すき焼、おさしみ、鰻、焼鳥、ホットケーキ、卵、ブリの罐詰、ふかしいも、ドイツ製の脂のギト〜
しているサケの罐詰、牛乳、柿

等とありとあらゆる物を作つたりして頂きました。毎日一日の食事を調べに来る當直の看護婦さんが、

「おしる粉、お椀に四杯！」

などと言うど舌なめずりして

「羨しいですね。」

と言うので、私は氣の毒になる程でした。

其の爲、目方はどん／＼ふえました。澤田先生にも「どん／＼肥りますね」

と言われた位でした。私は今まで「ホッ、ホッ」と言われていたのが、お見舞に来る人が皆「肥つた〜」と言われるので、嬉しくて嬉しくて堪りませんでした。

こんな楽しい、そしてこんな幸福な病院生活を私の外にした者がありませんか。けれど私には一つの悩みがありました。それは原子爆弾の患者には、肝臓ホルモンという少量ではあるのですが、それは〜痛い注射を必らずお尻にやらなければならぬ事でした。この注射が良いというので、一人一人少しずつ薬の量などを變えて、試験をするのでした。ですからそんなによくなつて来た私にも、させられるおそれが充分にあつたのです。

私の悩みはそれだけでした。とう〜それをしなければならぬ時が来てしまいました。それをしたのもやつぱりこの部屋でした。もう外出の許可や退院

の許可まで下されてからのことでした。

その日は、西日の差込んだベッドの上で、私は小母さんと一緒に夕食を頂いて居ました。すると一人の看護婦さんが

「注射をします。」

とはいつて来ました。私は今ごろ何の注射かと思つて驚くと、それこそ例の肝臓ホルモンだったのです。仕方なしに私はベッドに腹這いました。其の痛かつたこと！

私はベッドの手摺りをしつかり握つて歯を喰いしばりました。

「痛いでしょう。この注射は食鹽注射と同じ位の痛さですから、とつても痛いんですよ、もう少し我慢なさいね。」

そう説明する看護婦さんの聲も痛みの中に消えて行くようでした。

翌朝起きて見ると、注射の跡が腫れて、熱をもっていました。其の日も又痛

いホルモンを刺して、お尻の両側が見事に腫れ上り、私は腰掛ける事も坐る事も、そして寝る事さえも出来ないという有様になつてしまいました。

私はその痛い注射をしてから、毎日の病院生活がいやになつてしまいました。退院、退院と毎日お父様の御許しの便りを待つていましたのに、お父様からは相變らず

「落付いて、出来る丈、長く静養すること」

と言つて來るのです。お風呂に這入つても良いというお許しもあり、泰世や静子達がみんなでお辨當を持つて來た時には、一緒に箱崎のお風呂へ行きまして。それでも熱は出ませんでした。

私は毎日々々お父様の許しを待つていました。

それからこんなことがありました。

私は、未だ薄暗い内から看護婦さんが持つて来たゴム管を、一時間以上経つても呑み込む事が出来ませんでした。細いゴム管の先に鉛で出来た丸いものをつけた變なものを呑み込んで胃液の検査をするのだそうです。

「胃の病氣じやあるまいし。」

と、私は呑み込むことの出来ない小さな鉛をにらみつけました。二度ばかり看護婦さんに入れて貰つたのですが、ゲーゲーと何か上げて来て、苦しく息が詰りそうだったので、途中まで這入りかけたのを引張り出してしまいました。

二時間たつても、三時間たつても、小さな鉛はどうしても呑み込めませんでした。私は諦めてゴム管を投出すと寝てしまいました。けれど其の日はなんだか胸が氣持悪いようでした。

私は好きだつた部屋も、先生も、看護婦さんも、そして楽しい病院生活も、一時にすっかり嫌いになり、いやになつてしまいました。そして毎日、退院々

々と長崎のお父様にお手紙を出すのでした。けれどかえつて来る返事は、どれもこれも、私にとつて餘り有難くないものばかりでした。

十月十二日。晝食が終つたばかりの時、庄野さんが長崎からお見えになり、矢張り原子爆弾で入院して居られる坊ちゃんの所へ、いらつしやつた後、私の所に立寄られて

「お父さんからのおみやげ。」

と大きな包を渡して下さいました、私は中に若しや「退院してよし」の手紙も一緒に入つていたのではないかと、大喜びで開けて見ると、何の未だ青い蜜柑と藁草履が四足、轉げ出た丈で外には何も入つてはいませんでした。私は其の蜜柑や草履よりも、ハガキ一本でも「退院してもよし」のお許しを受ける方がどんなに良いか判らないと思ひました。其處でこれから又直ぐ長崎へ歸られる庄野さんにお手紙をおこつづけすることにしました。

お父様早く退院させて下さい。

退院許可は十日程前より出ています。澤田先生の廻診の時は簡単に診て大變宜しいとおつしやる丈です。近所の方がドン／＼退院します。岩津さんも昨日退院されました。此處に居るぞお尻に注射をして、腫れ上つて歩けなくなつたり、熱が出たりするし、又昨日は胃液の検査等があつて、ゴム管を吞ませられたりしました。ゴム管が吞めなくて、吐きそうになつて、苦しくて堪らないのでどう／＼やめました。

そんな風に、此處に居ると、何時迄も試験臺にならなくてはなりません。どうしても早く退院したいのです。今日でも、明日でも、一日も早くしたいのです。林先生の診察も毎日は無いいし、毎日熱を

計る位の事で、あとは試験なのですから、此處に居ても同じです。お父様のお許しさえあれば直ぐにでも退院するのです。熱も無いし、診察しても異状なしだし、それより早く家へ歸つて、ゆつくり氣樂にしていた方が良いです。お隣りのひごかつた方も二十日に退院なさいます。朝から退屈で何もしない様な有様です、此處だと矢張り不自由で困ります。どうしても一日も早く退院させて下さい。お頼みます。退院した方が宜いです。どうか退院させて下さい。

雅子のお願いは、何を送つて頂くよりも、お父様からの退院よしのお便りです、十七、八日には退院出来るようにして下さい。退院。退院。退院。

十月十二日

さようなら

雅子

お父様

この手紙をおことづけしてから間もなく、私の待ちに待っていた退院お許しのお手紙を、石田看護婦さんが笑いながら持つて来ました。

その手紙を読んだ時の私の喜びは、まるで何か新しい人生にはじめてふみ出す時のような興奮につつまれたものでした。

十月十八日の夕方、私は雨のしどろ／＼降る中をおその小母さんと一つの傘にはいつて、野間の山莊に歸つて来ました。

私の療養生活は、それから、翌年の三月までつづきました。

明治節の日のふくよかな菊の香り。霜の降りはじめた庭に咲いた山茶花の花。

そして、清淨な雪の季節、そんな日々を、私は私の身體を回復させる努力をつづけながら、いままでのことを反省し、將來のことを考え、一番平和な落着いたところでいたようです。

野間の山莊にも春が近いころ、私は元氣で十六才になり、新學期がはじまるので、長い療養生活にさよならして長崎に向いました。

私は靜かに走り行く景色を、車窓から無心に眺めながら、それ迄のことを考えていました。

恐ろしかつた工場での原子爆彈。

苦しかつたトンネル壕での夜明し。

辛かつた田上での病氣生活。

樂しかつた福岡での靜養生活。

走馬燈のように廻るそれらすべてが、皆私の尊い経験となり、教訓となつて蘇がえつて来るのでした。

私はふと賢一（従兄田邊賢一）さんからのお手紙の文句を思い浮べました。

あなたも悪夢の様な過去を思い出して、戦慄するときが屢々あるのではないかと思ひます。文字通り九死に一生を得た尊い體驗は、それこそ、どれだけあなたの生涯にとつて、貴重なものか知れません。

すべてが、あなたにとつて新生の時代ですね。古い雅子さんは一應長崎に於て死んだのかも知れません。古い日本と共に。

原子爆弾こそは舊日本の悪を潰滅させた斧鉞でした。驚くべき偶然によつて其の被害者となつたあなたは、そして又數多い死者の中から生命の助かつた幸運者の一人であるあなたは、確かに考えるべき數多くのことをお持ちのことと思ひます。あなたを襲つた一瞬の閃光と共に

に、それと同時に、幾萬の生靈があなたの周圍に於て霧消し消失してしまつたという事實が、嚴たるこの事實が、單に九死に一生を得たことを喜ぶ以上に嚴肅なものを暗示しているのではないでしようか。

僕は千載一遇の新生の機會を得られたあなたに、心からこの意味でお祝いを申上げたいのです。恐らくは亡きお母様があなたをお護り下されたのでしよう。

生命を楽しむ事は決して罪惡ではありません。今こそ、どんなに生きていくことが嬉しいことかと、あなたが御悟りになつた事だろうと推察しています。

あ、もう長興ヒガユのトンネルを過ぎました。汽車は全速力で長崎へ向つて驀進しています。もう直ぐ道ノ尾です。まもなくトンネル壕も見えることでしょう。

私はもう一度頭に描き出して見ました、あの苦しかったトンネル壕での夜明し
を。……………

第
二
部

あの日から一年 —— 日記より ——

八月九日、朝早くから曇りがちな天気。忘れることの出来ない原子爆弾の一週年である。

早朝起床、身心を清め、眞つ白な上着に、紺サージのスカートを着けて、さつぱりと髪を結う。妹たち二人には、水色の揃いの洋服を着せ、家族そろつてお諏訪様^{すわ}にお詣りをした。

十一時二分、重い鈍いサイレンのうなりが、時刻を告げた。今、ちようど一年前の今であつた。私が、あの考えても恐ろしい、熱い桃色の閃光を浴びたのは……………。

臺所で手傳いをしていた私の身體は、思わすこわばつて、おのすから、頭の垂れるのを感じた。犠牲とられた四萬の同胞のために、私の臉は、固く閉ざれてしまつた。サイレンは餘韻を残して終つた。あゝ、去年の今、私が氣がついて顔をおこしたときは、一瞬まえまで、頭上をおゝつていたガラス張りの屋根は、土煙にすかして見える青天井と化していて、首筋からは、眞ッ赤な血が、ドク／＼と地面にこぼれおちていた。無我無中で、足の上に積り重なつたものから足を引き出して、恐ろしさにふるえおのゝきつゝ、ひしやげた建物の下から這い出したのだつた。

夕方は、昨年原子爆彈の際、いろ／＼とお世話になつたお役所の方々をお招きした。私も、皆さんと共にごちそうをいただいた。ごなたも、私に「おめでどう、おめでどう」と繰返えされて、私は、うれしいような、恥かしいようなきもちで一杯になつた。お酒など召上られ、みなとても愉快そうで、はなしは

いつまでも盡きそうになかった。

お客様方の歸られたあとは、急に、しんと静まりかえつてしまつた。どこからともなく、うるおいあるものあわれな尺八の音が、夜風とともに流れてくる。窓ごしに、星のまた、きは美しい。清らかな尺八の音や、星の輝く空氣にひたつていると、お氣の毒にも、亡くなつたおともだち、家族を失われたおともだち、傷ついたおともだちを思い出す。幸福な私は、何としてこれらの方たちをお慰めしたらよいかわからない。

あれから一年たつた、——そのことを實感として抱きしめるように、私は星を仰ぐ。人間の生命いのちの不思議を思うのである。あの日の私の頭の傷がもし内出血を起していたら、私は今日、こうして、思い出を持つことも出来なかつたに違いない。

亡き母が護つて下さつたのだという氣持は變らないけれども、もつともつと

割り切れない不思議なものが人間の生命いのちの流れにはあるような気がしてなら
ない。

あの日に倒れた多くの人たちの御めいふくを謹んで祈るとともに、私はこの
不思議な何物かの力の前に、謙虚にお祈りを捧げようと思う。窓から吹いてく
るさわやかな風にささやくように――。

父の贈りもの

私が、原子症状を征服して、元氣に全快したとき、多數の方々から、澤山のお祝や、贈物をいたゞいた。私は、そのひとつひとつを、心から嬉しく、感謝の氣持一杯でお受けした。

その中で、父から私が受けた贈りものには、しも水引もついていなかったけれども、この上もなく私の胸をおごらせた。それは東京から、長崎に移つて三年の間、私が、晝夜夢にまであこがれていた「東京行」という贈りものであつた。昭和二十三年一月、このプレゼントのパノラマが、一つ一つ眼のまえに、展開されたのだつた。

(一) 康子さん

小石川表町の、焼野ヶ原の丘の上、雪雲を背景に、二つの土藏が並んでいる。この燻んでいる土藏こそ、三年前までは井上の祖父の書庫であり、今は、私が一番會いたいと願つてゐる従妹の康子さんが住んでいる家であつた。

兄が、さきに立つて、

「こんにちわ。石田でユす。」

ど、外から叫んだ。土藏の横から、なつかしい康子さんの聲が、一瞬に、いままでの時間のへだたりを斷ち切つてひびいて來た。

「まあ。雅子ちゃんよ！」

私の臉には、オカツパの幼い少女だつた「ヤコチャン」の姿が浮んでいたが、今、バラツクの臺所の、板と板とのすきまには、康子さんの赤いブラウスの色

が、ちらついている。私は胸がどき／＼して來た。

さつと、康子さんの美しい姿が現れた。眼の前から、幼い康子さんの幻が、ふつと消え去つて、すつかり立派にきれいになられた康子さんが、私を見るなり叫んだ。

「あらッ、雅子ちゃん、こんなに大きくなつて！ まあ、まあ！」

私は、言葉が出て來ないので、涙がこみあげてきそうな笑顔で、手を差し出した。ただであつた。柔かい、暖かい康子さんの手だつた。

長い間、喜びの沈黙がつゞいた。紺がすりのモンペに、赤の上着を雑作なくはおつただけではあるが、そのうるわしい眉目、愛らしいも、色の頬、素直な黒髪の光が、私の心を強く強く魅きつけて仕方がなかつた。

「人間は變らないのね。この焼け跡にたつていても、こんなにもなつかしい方たち！ みんな同じじゃないの！」

私は心の中で叫んでいた。戦争は悪い夢のように私たちからいまは過ぎ去つたのだ。

どこからか、お兄さんの賢一さんが、かけつけて来た。私たちは、なつかしさの餘り、みんな、いつまでもたゞ、笑っていた。心の中は、こみあげる暖いもので濡れながら。

(二) 焼

跡

黄いろの塀だけが低く残っている。

私は、ぼんやりと立ちすくんでいた。

生れてから十年あまり、私の生活の舞臺となつてくれたなつかしい、小石川竹早町のわが家の焼跡である。

塀の内側にはいき。そこには、かつて、小さなくぐり木戸があつて、取り付けられた銀の鈴が、戸を開けるたびに、リン／＼とよい音を響かせたものだったのに――。そして、その門をくぐると、二列に並んだみかげ石の敷石が、玄關までずつとつゞいていたのに――。その右手には、ちんちようげの幾株があつて、冬には、自然の香水の匂をふりこぼして、咲き誇つたものだつたのに――。柿、ざくろ、いちじくなどの果ものが、季節々々に私たちの目をよるこばせて、庭のあちこちになつていたのに――。今は、ただ、それらの木々の跡さえもなく、茂るにまかせた雑草が、霜にうたれて、褐色にしおれている。焼跡の土地は、何だか非常に狭く感じる。いや、こゝにいたころは、まだ私が小さかつたから、家が大きく感じたのかも知れない。

あゝ、こゝが風呂場、こゝが茶の間、こゝにはピアノがあつたつけ。きれいな茶色のピアノだつた。ドイツ製のベスタインであつた。樂器の修理屋さんが

來た時、あのピアノを直しながら、よく、「音のいゝ、立派なピアノだな」と呟いていたのを覺えている。修理が終つて、音がよくなると、そのころ、まだ小つぼけだつた兄と私が、あらそつて、それを獨占しようとした。兄が力も強いので、ごかんと先に椅子にすわつてしまふ。そして、私は泣きじやくつたものだつた。母が、そばからみて、

「まあ、また、喧嘩をやつてるの。お兄ちゃんは、妹には何でもゆすつてやるものですよ」

と、私を助けてくれたりした。母はピアノが上手だつたから、私は、母にピアノを習つたこともあつた。母——今は亡き母。私の生命を護つてくれた母の面影が、このなつかしい家の焼け跡に、いつばいにひろがつているような氣がする。

私が、小學校最後の年をかざる妙高山への修學旅行に發つ前の晩であつた。

そのころから、もう大分弱つていた母ではあつたが、一生の思い出となる翌日の出発のために、私の枕もとで何かと用意してくれていた。私は、うれしさに胸をおどらせながら、母に何やら話しかけはじめた。そのとき、私は、何と思つたのか、こんなことをいつた。

「ねえ、お母さま、あたしが修學旅行にいつている間に、死んじやつたらいやよ。雅子、泣くわよ。」

母は、これをきいて、さびしそうに笑つた。

「そんな馬鹿なことを………。大丈夫よ、あなたが歸えるときには、上野驛まで迎えに行つてあげましょうね。」

私は、その母の言葉に満足して、やがて寝いつてしまつていた。

馬鹿なことを言つたこともだつた。

それから半年ばかり経つて、小學校を卒業するころには、母の病状は悪化し

て、正月から東大の内科に入院していた。

卒業式の日、もてあます程大きな卒業證書をもらつて、ほんとうに、とび上りたい程、うれしかつた。ついて來た父に、すぐ見せた。父は、喜んでくれた。でも、私は、病院にいる母には、なお見せたかつた。私をこの學校に入學させてから、その卒業する日を、夢に見つゝ待ちわびていたのは、父よりもむしろ母だつたろう。“一刻も早くお母さまに”という一念で、どうどう、いつも一緒に歸えるともだちも待たずに校門を出た。雨がパラ／＼と降り始めた。電車の停留場まで、息もつかずに走つた。電車にとび乗る。電車がおそくて仕方がない。

東大前で降りたとき、雨はどしや降りになつていた。小さな傘を通して、頭から降りかゝつてくる雨で、水びたしになつた。手と足が凍るように冷たかつた。私は卒業證書だけは濡らすまいとして、冷たい手ににぎりしめて走つた。

電車を降りてから約十分、ようやく母のいる病室にかけ込んだ。さつきまでは、しわ一つなかつた卒業證書が、しつとりと雨に濡れてしまつてゐる。でも母は、その濡れた證書を見、おごもだちの誰の親よりもうれしそうにほおえんで、

「立派なお免状をもらつておめでどう。おめでどう。」

と、繰返えし言つてくれた。

昭和十八年十一月七日、菊の香がほのかにたゞよう夕べ——それは、母にごつて、この世の最終の夜であつた。私は、それを知つて、戀しい母の青白い顔を見すえながら、その左手にすがつて泣きじやくつた。泣いて——涙のなくなるまで泣きつづけた。いくら泣いたからとて、母の最後は目の先まで迫つて來ていた。次第／＼に、その手が冷くなり、唇の色が失せて、もはや私の前に、母は無く、そのなきがらだけが、空しく残されていた——

「雅子、歸ろうよ。」

耳もどで、兄の聲が、つつけんどんにひびいた。

燒跡に夕闇が迫つて、そぞろに寒さも増してきていた。

(三) 舊

友

なつかしの通路、なつかしの校門、なつかしの校舎。これらのものが、次々に目にはいつた時、どんなに胸をどきめかしたことだつたらう。ちようど數年前、入學式の日、希望にみちて校門をくゞつた時に似ていた。

校舎の中にはいる。登り馴れた階段を、久しぶりに一段々々ふみしめて登る。セーラー服に、女高師高女のバンドを、しめたなつかしい姿の生徒が、そこいらを走つたり、行きちがつたりする。ふつと横を歩いていた二人が、私をのぞ

きこむ。あゝ、飯塚さんと、吉田さん。

突然、二人は

「あらッ!!」

と大聲に叫んで、教室にとび込む。

「ね、皆さん、石田雅子さんがいらつしつてよ！」

大きな聲が、こゝまで聞こえる。級友が、入口から押合つて、次々にとび出して来る。まるで、何年か前、警戒警報のサイレンがなつて、避難したときのように………。だが、みんなあの時とちがつて笑いながら、口々に、私の名を呼んで走つて来る。夢のような一瞬、私は、何十人かの友にかこまれてしまう。顔、顔、顔、みんな笑つてる顔、でも、一番會いたい親友の大隅さんがいない。と氣付いたとき、むこうから、今登校したばかりの大隅さんが、はちきれぬほどの笑いを浮べて、とび込んで来た。

大勢の友達のものの中に、大隅さんと私は、抱き合い、痛いほど強く握手をする。

私が、この學校にいるころ、二人の姿がそっくりで、よく間違われた。大隅さんは運動選手だったが、私は下手くそ、大隅さんは繪がいが手だったが、私は好きなので、よく學校の提出物など、大隅さんの分まで、描いてあげたりしていた。友達が私に「フットボールの試合をしましょう」とさそつたり、「繪をかいて」と、大隅さんがいわれたりする程、二人はよく似ているのだつた。ところが今、みんなが集まつている輪の中で、手を取り合つている二人は、ずいぶん違つてしまつた。背の低い大隅さんと、高い私。大隅さんの長髪と、私の斷髪、あかぬけのした都會人と、すつかりお上りさんになつてしまつた私。そして、恐ろしい原子爆彈の洗禮は知らない大隅さんと、苦しい經驗をして來た私。

岩永先生が、職員室の前を向うの方に歩いていらつしやつた。

「先生！」

と、呼びよめた。先生は振り向かれた。なにも豫告していなかつたから、先生が驚かれたのは無理もない。長崎にいる筈の私が、急に、先生の前に現れたので、ぼう然となすつてももの言われぬ。三年前と少しも變らぬ美しさで、あの先生の全身を象徴する眼の光が、私にそゝがれた時、私は、よろこびをつゝみきれなかつた。

「まあ!! 雅子さんじゃありませんか。まあ、まあ大きくなつて。ごなたかと思ひましたよ。全く、こんなに大きくなつてしまつて——」

それまで驚きにはりつめられていた先生の表情が、急にほころびて、たどえようもない程、うれしそうな笑にかわつた。

私を、わが子のように連れて校内を歩きまわりながら、出あう先生ごとに、

こんなことを言われる。

「あのころ、二年生で、私の肩よりも小さかつた石田雅子さんが、今では、私よりもこんなに大きくなつていらつしやるんですよ。長崎で原子爆弾にあわられて、一時、随分心配でしたんですけど、もうこんなに元氣になつて、今は、長崎女專の一年生ですの。私の受持つた級の最初の進學生ですよ。まあ一寸、見て下さいまし。」

と誇り顔に繰返えされるのが、私にとつてもたまらなくうれしかつた。

(四) 別 　　れ

楽しい時のたつのは早い。もう、東京を離れてしまつた。車窓から、あとへあとへと、電柱の影が過ぎてゆくたびに、遠ざかつていく東京を想つて、うれ

しさの感動があまりに大きかつただけに、馬鹿にセンチメンタルになつてしま
う。〃會うは別れの始め〃と、古語にいわれてよく知つてはいるが、ほんとう
に別れはさびしいものだ、今更のごとく強く感じる。

静岡まで送つてやろうと、並んですわつてゐる兄が、ポケットから、小さな
桐の箱をとり出す。

「これ、雅子への僕のプレゼントだ。何だかわかる？」
そつと蓋をあけてのぞくと、兄の心ずくしの赤い小さいブローチが光つてい
る。

「氣に入つた？」

私のうなずくのを見て、兄はほつとしたようだつた。

汽車はびた走りに走つた……………

そして次第に汽車の速度がおそくなつてゆく——静岡だ。

「雅子、じゃ、降りるよ。あの、お父様に、わさび漬のおみやげをもつていつてあげなさいよ。一箱、たしか三十圓。僕が、買つて来てやる。」

兄は席をたつて降りていつた。そのあとの空いた席に、顔の赤黒くやけた見知らぬ小父さんが、ごつかと腰をかけた。プラットホームの屋根と、汽車の窓との間には、雨がパラついている。ホームには、人々がうよ／＼と雑踏している。もの賣りの奇妙な聲と言葉が、耳ざわりになる程大きい。動きたくもないので、じつごうしろによりかゝつて、眼を閉じていた。

ベルが鳴つた。つゞいて、ホイッと汽笛がひびいた。

いよ／＼兄ともお別れだ。だが、まだ歸つてこない。どうしたのだろう。

ガタン、と車體がゆれる、しずかに動き出した。兄は一體どうしたのだろう。別れの挨拶もしないで、汽車が出てしまう。不安にかられて、胸さわぎがした。すわつても立つてもいられずに、思わず腰を浮かして、ハラ／＼として

いた。

「買って来た！」

兄の聲。ホツとする。

「ものすごく人が多くて、ずつと並んでるんでなか／＼買えなかつた。間にあつてよかつた。値上りで四十圓なんだよ。お父様にね。」

兄はホームを走りながら箱を渡した。汽車の速力がだん／＼と増して、兄の大股の靴音が苦しそうに早くなつた。

「泰世や静子の勉強よく見てやれよ。お母様にもよろしくね。お父様には、無理しないようにつてね。じゃ、雅子、試験勉強なんかにあんまり無茶したら駄目だよ。元氣でしつかりやれよ……。じゃ、さようなら……。氣をつけてね、さようなら。」

私はのどがつまつて何も言えなかつた。

窓から、ふつと兄の姿が消えてしまった。私は、首を出して、手を振ろうともしなかつた。涙があふれて、こぼれそうだったから――。人に氣ずかれないように、直ぐポケットから手帳を出して、バラ／＼と頁を繰った。昨日の午後舊友に名残り惜しく別れたとき、エンピツで書きつけた詩があつた。

一人ぼつちのさびしいわたしの夢が

又みごりの國で展開される……………

こんな文句が、浮出しているように、眼にとまつた。

“さびしいな”

私は心の中で獨りつぶやいた。パタリと頁を伏せた。“さびしいなんて思つてはいけません。學問をするのに、獨りなごさうことは決してありません。”

だれかのことばが、ふと、叱責するようにふりかゝつて來るのを覺えた。
汽車はもう全速力で、田圃の中を走つてゐる。

「生きていた私。新しい生命を與えられた私。これからの生命が美しいものでありますように。」

私は手帳に、こんなことを書きつけた。私にとつて長崎でのあの恐ろしい経験の思い出は生涯つきまとうだろう。時にはそれがとてもつらいと思えたりもするけれども、その思い出こそ大切にすべきものだと考え直したりもする。人間がほんごに「新しい出發」と思える経験は、そう度々はないものであろう。私は、あの経験を無にはしないようにしよう。父の、私への贈り物に對する感謝も、このような誓いで表すことが一番よいのではないだろうか。

汽車の響きも、私の「新しい出發」をはげましているように思えて來て、私は窓の外に目を移すのであつた。

芍

藥

—— 日記より ——

朝、顔を洗つているとき、窓ごしに白い花が十ばかり、チラホラとしているのを見た。

「あゝ、今年も、もう芍藥が咲いた。」
獨りつぶやいて、庭に出た。冷めたい朝の空氣がみなぎつて、土は黒く濕つていた。

まだ、すつかり明けきらない大空には、灰色の雲が、ひくく、あつく、たれこめて、うろごうしかつたが、その黒い土の上にすくすくとのびて咲いた芍藥の花が、たゞ明るく、清らかで、どのきれいな色が、空の濁りを忘れさせてくれた。

もうすつかりひらいた花は、あでやかにうすも、いろの花びらを、思う存分にひろげている。そのうちがわの、眞つ白な花卉は、一つ一つ劍のように鋭くかすかに震えて躍動しているようだ。芯には、濃い紅のいろが、全體の花の統一をまもつて、鮮やかに目立つている。

だが、いまにもほころびようとしている花も、つゝましやかに美しく、私は好きだ。十二ひとえのように、いく重にもうち重つたなかは、少しばかりのぞいた白いところが、ときいろの影をなして、いかにも奥ゆかしく見える。

まあ、小さいつばみは、うす緑の葉つばに包まれて、まるで赤ん坊のにぎりコブシのように愛らしい。

そのうつくしい花の一つに、私は顔を近寄せた。ほのかな、甘い香だった。私はその花びらの一枚にふれようとした。エンゼルのうすぎぬのように、やさしい／＼花びらは、ちぎれてとんでゆくかと思われた。私はさわるのをやめて、

じつと花を見つめた。その、まじりけのない清い香や、うるわしい花びらの色が、私のふれるときに、汚されるような気がしたから。

人々の心が、こんなにきれいで、美しく、明るかつたらな、と思った。

あやしい雲がやぶれて、朝の太陽が、さつと地上にふりこぼれた。花びらの上に、銀の露の玉がキラリと光つて、莖のところ、せつせと仕事にいそしんでいる二匹の、大きな黒い蟻が、くつきりと照らし出された。

眼を病む

十九になるお正月が迫っていた。

そのころ、私は、古典の英詩を學んでいた。なかで、特に私の胸を強く打つたのに、ミルトンの“On his Blindness”という四行詩があつた。この詩は、彼の半生を暗くした盲目についてうたつたもので、その暗い半生を、始めは非常になげいているが、やがて自分の愚かなるを氣ずき、
“神よりのこうした試練に、一番耐えていくことの出来る者こそ、一番多くの神への奉仕あり”と、叫んでいるのであつた。私は、この精神につよく共鳴したので、この詩を暗誦した。東京で、苦學をつづけている従兄にも、年の初めにこの詩を送つてはげ

ました。それから、ほんの数日のちであつた。

正月の夜、何年ぶりかでいく人かの親しい學友を招いて、たのしく笑い興じているとき、私は目の中にゴミがはいつたようだったので、涙を出そうとあくびの眞似をしたり、水で洗つたりしていた。

そんな簡単なことが、はじまりで、二、三日後には、兩眼瞼が眞つ赤にふくれ上り、熱がのぼつて、寝ついてしまつた。私はその時、“十九の厄年”とよくいわれるのを思い出して、迷信だと片附けようとしたが何だかぞつとした。

醫師の診断では、始めはたゞの急性カタル性結膜炎で、まもなくよくなるだろうといふのであつたが、日々に病状は悪化して、兩眼は、全く閉され、視界は、たゞ暗黒となつた。

瞼は、ゴム風船のように腫れるだけ腫れつくして、今にもち切れそうに、パリ／＼と痛む。

眼がしらに、焼火箸を突つ込んで、眼の玉をえぐり出したらよさそうに、ずきん／＼と痛む。

止めどもなく流れ出る分泌物や涙をぬぐおうと、ガーゼで押さえると、しまいいには、瞼の皮がぬるりとむけて、ひり／＼と痛む。

あるときには、眼球が、何か異様な鈍さをもつて、じれつたいほど、ずつくり／＼と痛む。

こんな痛みが、かわるがわるに、間断なく私を悩まし果した。眼だけではなない。眼を中心として、額も耳も、齒も頭も、頸も背中も、身體全體が、脈のうつたびに痛んだ。

おまけに、舌があれ、鼻がつまり、咽喉がはれる。光はまぶしくて、曇の日でさえ、一日中、雨戸は閉めている。食事といつては、刺戟のないリンゴ等を、ほんのいく口かいたゞくだけで、あとは何も食べられないし、食べても味が無

い。夜は背の口から、明けは鶏が鳴くまで、夜通し眠むられない。たまに睡眠劑をのんで、無理やりに眠ると、恐ろしい夢にうなされて、身體中苦しく、バタ／＼あばれまわる。一日二度の病院通いも、一とおりの苦しきではない。終いには、お手洗いにも一人で行けなくなつてきた。後も先も、ひとの存在もわからず、"今"と、"自分"だけをもてあましてしまう。神經が、物凄く過敏になつて、ひとのいうことはことごとく、蹴とばしたい程癪にさわつて仕方がない。この途方もない病人を扱かうのに、周圍のひとはさぞ大へんだつたらうと、今になつて考えて、後悔する。しかし、そのとき、そんなことは思いもしない。ぐつすり眠つてしまつたら、どんなに樂でよいだろうと、絶えず寢がえりをうちながら、考えつゞける。

色々の検査をしたが、結局原因はよく判らない。しかし、一番心配していた原子症ではないそうだ。内科の醫師の意見もあつて、三時間おきのベニシリン

の注射や、一時間おきのペニシリンの點眼がはじまる。それと、病院通いだけが私の日課であつた。

病名は、重症悪性全眼瞼炎というのが兩眼で、右側は更に續發性角膜浸潤と
いうことになつた。もはや、ひとごとでなく、全く、自分がミルトンの如く、
盲同然であつた。いや、同然どころではない。あごから醫師の話によると、續
けて合計五〇〇萬單位ものペニシリンの効力を借りなかつたら、恐らく私は、
間違ひなく失明しただろうと云ふことであつた。

こんな苦しい、恐ろしい闘病の日が、何日つゞいたろう。三ヶ月の出來ごと
が、つかれはてた病人の私にとつては、百年戦争をしたよりまだ永く、辛いよ
うな氣がした。ペニシリンの注射をはじめてから、ようやく、私のひどい炎症
も下火となつて、腫れも次第に退却しはじめた。何ヶ月振りかに、はじめて下
まぶたと、上まぶたの細いすきまから、光がさし込んで來た。自分の眼で、久

し振りに、おそろ／＼鏡をのぞいた時、私はまぶたが、眉毛のところまで、ちようご乾燥なつめの實のように、眞つ黒な跡を残しているのを見て、これが自分の顔かと驚いた。

私は、まだ非常にまぶしいので、わざと暗くした部屋のなかで、側にいる叔母に級友に宛てて出す手紙の代筆をお願いした。私は、仰向いたまゝ、眼を閉じて口を切つた。

皆さん、恐ろしくも私の兩眼を奪おうとした病魔も、よう／＼退散しはじめ、近頃では、眼を少しばかりあけて、周圍の物を見ることが出来るようになりました。私が永い間、薄暗い床の中で、ミルトンのあの盲の詩を練りかえし／＼朗誦しつゝ、病魔と戦つてゐる間に、もう外は春が近づいてゐるようですね。春の香が、ほのかにしますもの。もうじき

川端の柳が芽をふき、校庭のヒヤシンスが咲くでしょうね。その春の訪れとともに、私の病氣も、すっかり恢復するものと信じております。

私は、皆さんと一緒に、今學校で勉強出来ないのが本當に残念ですが、私もこの床の中で、皆さんが勉強に努力されると同じ位、病氣と闘つております。でも私の持つて生れた運命を否定しようとは思いません。私は、ミルトンのように、神よりの試練に耐えて、最後まで病魔を退治致します。そして、又、皆さんと再び學べるようになるのを待ちましょう。

今まで三ヶ月間というものの、全く閉ざられていた外界が、自分の眼に、はつきりと映ずるようになった——こんなうれしい、こんな幸福な味わいは、そんなに多くの人が、經驗するものではなからう。

久しぶりの登校。ウインドウの外は、若葉のみぎりも生々と照り映えて、鳥

の鳴きしきるのが、かすかに耳をかすめる。窓巾一ぱいの太陽の光が、斜に教室の床を照らす。開け放した窓から、爽やかな風がみんなの服をやわらかく波立たせる。こうしたうらゝかな春の氣の漲る教室に、先生の凜とした聲が、皆の緊張をうながす。

何もかも、自分の眼ではつきり見ることの出来るうれしさ、有難さ。この眼で眞直に、教壇を見上げる久し振りのこの張合ある姿勢。

先生は、私達、女専生活最後の學年の始めに當つて、この年を、*「我等の生涯の最良の年」* たらしめよとて、出来る限りの勉學と、最大の健康への注意を強調される。

今年度の自治委員の選舉がある。五月の英文辯論大會出場選手の投票がある。明日からの時間割の發表がある。新しいテキストが配られる。修學旅行の案が出る。寫眞をとろうと誰か、言い出す。皆、めい／＼が、勝手に話をはじめめる。

その中を、私はあつちにもこつちにも引張りだこにされながら、たゞたのしさに笑っている。何もかも、躍びあがりたい程うれしい。まるで、小學校の一年生みたいに、單純で明るい心だ。いや、私は本當に子供なのかも知れない。一度は原子爆彈で、一度は今度の眼病で、二度までも生れ變つたのだから、きつと、随分若くなつてしまつたのだろう。

私は、全くほがらかな氣持で運動場に出た。スポーツをする人たちのボールの音が、きもちよく天地にひびく。プールのそばの櫻並木は、絢爛たる美しさで咲誇っている。

春だ!!

永井隆博士を訪ねて

浦上の丘の上は、三月の末とはいえ、まだ冷たい北風が吹きつけていた。

はるか右手の小高いところに、原子爆弾で崩壊した浦上天主堂の、赤煉瓦の残骸が見える。そのそばに、終戦後、新しく木造の教會が建てられている。このあたりの全景が、冷たい北風のなかに、わびしく眺められる。この丘と、あの天主堂の丘の間は、盆地のようになっていて、だん／＼畠のあいだに、ぼつり／＼と戦災住宅の小さなトタン屋根が見下ろされる。空模様は、灰色に曇つていて、いまにも降り出しそうな感じである。

さ、やかな菜園の小みちを進むと、左手にポツンと小さな家が建っている。

本當に小さな、一坪ほどの、眞四角な家である。家というより、寧ろ、お堂といった感じである。風が吹くたびに、立てたガラス戸が、がた／＼とやかましく鳴る。そのガラス戸に、病勢進行中のため、面會謝絶 主治醫」と書かれた白い張紙が目につく。永井博士のおうちである。白血病と闘いつつ、刻々として近づく死に面しながら、原爆の記録「長崎の鐘」を始め、多くの名著を世の中に送られた永井隆先生のおうちである。

半月ほど前、私が、あの重い眼の病氣で床にいた時、永井先生のおつかいで、弟さんが、私のうちを訪問され、「雅子斃れず」の出版を一日も早く、と激勵していかれたそうである。それで、大分眼のよくなつてきた今日、そのお禮の意味もこめて、父や兄と一しよにこゝを訪れたのであつた。

私たちは、特に許されて、その小さな家のなかにはいることになつた。私が、永井先生をおたずねするということを聞きつけた新聞記者の人たちが、記事を

どうとうついて來るのが、身を切られるほど、つらかつた。

「雅子が、先におはいり。」

と父にいわれて、私は如巳堂の障子のきわに立つた。始めてお會いする永井先生、一體どんなお方だろう。日本中、いや外國の人々までが、「聖者、聖者」とたゝえている永井博士、きつと尊い、立派な聖いお姿の方がちがいない。玉手箱の蓋をそつとあけるような魅力を感じながら、私はしずかに障子をあげた。そしてお部屋の中をのぞいたとき、全く呆氣にさらされて、一時、茫然と立ちすくんでしまった。ほんの壘一枚へだてた向うに、餘りにも私の豫想に反して、まるで土のなから掘り出された埴輪ハニワ人形か、澁い色の骨董品を連想させるような、永井先生が横たわつていらつしやつたから……。

しばらくしてからわれにかえり、あわて、丁寧にごあいさつをした。たゞ、二壘以外に何の出つ張りもない低い天井の間、頭は壁につき、足はガラス戸

にふれている博士は、全く油氣もなく、瘦せ衰えたお姿でいらつしやる。もはや、呆氣にとられているどころではなかつた。先生が、聲もかすかにふるえながら

「あゝ、いらつしやい。まあお上りなさい。」

と、すゝめられたが、あまりにもお氣の毒で、靴を脱ぐことさえも、しばし躊躇した。

周圍の人にうながされて、ようやく疊の上に坐つたとき、私は思わず涙が出そうになつて、先生のお顔をまともに見ることが出来なかつた。眼をそらして、その狭い、二疊の部屋を見廻わすと、向うには、くぼんだ棚が設けられていて、多くの書類が、雑然と重ねられている。その横の方に、“ロザリオの鎖”、“この子を残して”、“亡びぬものを”、“生命の河”、“長崎の鐘”などの數冊が、並べられていた。棚の隅々は、聖母マリヤの小さな像と、黒い十字架が立つて

いた。枕もとには、大きなラジオが据えられ、その横に、呑み干した湯のみ茶わんが一つころがつていて、先生の日常の生活の一部がしのばれる。置時計が寝ていらつしやるどころから、いつでも不自由なく見られるように、天井の片すみに、小さな棚をつくつて、おいてある。

私は、胸が一杯で、ことばも出ない。父と兄とが、かわる／＼に何かお慰めのことばをのべている。兄は、歸省前、東京で見てきたばかりのバラ座の「長崎の鐘」公演についてはなしはじめた。そのとき、はじめて先生のお姿を、まともに見た。なんとお痩せになつてをられるのだろう。あまり痩せていらつしやるので、眼ばかりが、きもちの悪いほど、ギョロ／＼として、手くびから先は八つ手の葉のように大きく感ぜられる。時々苦しうに息をつかれながら、それでも兄の話す「長崎の鐘」の實演の好評を、うれし／＼一つ／＼うなずいて聞かれる。ふと氣がつくと、お腹が山のように盛り上つている。いつかお

寫眞で見たときは、まだ腹這いになつて、原稿かなにかを書いておられたが、今はとても腹這いになられそうにもない。仰向いて下さい、苦しうに肩で息をつかれる。私は、先生の御本がベストセラーで、世の人々の人氣を、あれ程よせているが、讀者は先生に對してどんな氣持で讀むのだらうと、考えた。おそらく、こんな大きなお腹をかゝえて、字を書くことさへ容易でないことまで、考えながら讀む人は少ないだらう。

やがて、先生は私の方に話を向けられる。

「雅子さん、長崎で、原爆の著書は、あなたの本と私の本とたつた二つだけなのですよ。」

そんなことは、私に堪まらなく勿體なく思われて仕方がない。恥かしくて、じつとすわつていることも出來ない。

「だがね、あれだけで止めちやいけない。もう一度、書くんですよ。僕はあ

あなたが書かないときは、あなたが遊んでいるとしか考えませんよ。僕はそう考
えますよ。しかしね、僕たちは、二人ともいわば旅人なんだ。生れながらの長
崎の人ぢやないんだ。長崎の土に對する愛着が少ない。どうして土地の人が書
かないんだろう。しかも、あなたは患者、僕は醫者、これじや後世の人たちが、
長崎の原子爆彈は、醫學界にだけ落ちたと考えるでしょう。どうしてみんなは
書かないんだろう。いや、文筆家は書けないんだ。社會の批評がおそろしくて。
僕たちは、素人だからこそ、書けたのだ。原子爆彈で染つた泥と、あかと、血
をぬぐつて、それをそのまま、文章に連らねた僕たちの記録なんだ。それに人々
が飛びついてくる、不思議なくらいにね。

僕はね、世間の人にかつぎ上げられていられるかも知れない。實際、上げられて
いるんですよ。僕は自分でそれを知っているんだ。しかしね、わたしの書いた
本が映畫や芝居になつたりして、そのために、どれだけ多くの人たちが食べて

いつているかわからない。その人たちが、疲れ果てた仕事の歸えりに、酔ダコの一皿に、カストリの一杯でも楽しめば、それでいゝじやありませんか。僕は容易に書くことが止められないんだ。」

切れ々に苦しそうな語調ではあつたが、そういわれる一つ一つのことばは、私の頭にしつかりと刻み込まれた。私はふと、いつか二、三のともだちと、永井博士についてはなし合つたとき、一人の友達が、

「永井さんは、時代便乗者だから嫌いだわ。」

と言つたのを思い出した。他の一人の友達が、

「でも、あれだけ有名になるには、やつぱりそれだけの偉いところがあるからだと思ふわ。好き嫌いは別として、偉い方と思ふわ。」

と、主張した。それらのことと、今の先生のおことばとを比較してみた。そして、私は、先ず第一に何をおいても、永井先生はほんとうに偉い方だといゝ

たかつた。

お身體は、全く見るもあわれに衰弱しておられるが、お考えは、ほんとうに遅しく、生き／＼していると感じた。そのなかにひそんで湧いてくるものが、實に立派だと思つた。先生は更にことばをつがれる。

「あの爆弾で死んだ人たちは、どんなに、叫びたいか知れない。平和のためにね。僕たち生き残つたものは、かれらに代つて、世界に叫んでやる義務があるのだ。ねえ、雅子さん、僕はそう思つていますよ。」

私は一こともものをいわずに、黙つて先生のおことばにうなずいていた。そのあいだにも、こんな立派な先生が、やがてはこの世を去つていかなければならないのかと、ちらと考へて、ほんとうに惜しい、かなしいことだと思つた。私たちのためにも、そしてこの先生の幼いお子さんたちのためにも――。

寫眞班が、いくつかの寫眞をパチ／＼とやつていたが、今はそれもあまり苦

にならなかつた。ただ、こんなに偉大な先生と對面して、こんなに親しみあることばでおはなしを聞いていることが、身にあまる程、勿體なかつた。

「人間には苦しみがある。その苦しみを、ごまかすのでなく、それに耐えていくところに進歩があり、發展がある。ドストイェフスキーだつて、曾我廼家五郎だつて、サトー・ハチローだつて、みんな苦しみがあつた。そこに作品が生れるんですよ。」

雅子さん、成長した今のあなたが、もう一度筆をとられて、是非原爆記を書きなさい。あの夜を明かした防空壕の中だけでもいい。やけどの深堀少年や、朝鮮人のおばあさんなどのところを、もう一度、もつと深く掘り下げて描いて見るんですね。立派にまとまつたい、ものが出来るでしょう。今度書くと、あなたの脳裡に強く残つたものだけが、藝術的に綴られることだろう。僕は、それを望んでいますよ。」

こうした先生のおこぼは、泉のように次から次と湧き出でて、なかなか盡きそうにもない。父が、先生のお身體に障つたらいけないからと、うながしたので、私たちは、名残り惜しく、靜かに立上つた。

「どうぞ、どうぞお大事に。」

このことばが、私の先生に向つて發した最初のことばであつた。そして、もうそれ以上、なんにも言えなかつた。たゞ、心からのおじぎを繰返した。先生は苦しそうな顔を少し枕からもち上げて、頭を下げる様子をなさつた。狭いお部屋のなかから、兄たちが出たあと、私は先生のお顔をじつと見つめながら、靜かに戸を閉めた。

外は冷たかつた。遠く、天主堂もうすら寒く見えた。

翌日、新聞社より電話があり、昨日の寫眞が失敗したので、今日、もう一度

ごりなおすから、永井先生を訪ねてくれという。私は都合をつけて、今日は花束をもつてお見舞にうかがった。

先生は昨日ほどお元気がなかつたが、私のもつていつた花を、ほんとうにうれしそうに受取られた。赤いカーネーションが、先生の頬のそばで、かすかにふるえていた。

「ほんとうに有難う。じゃあ、僕は雅子さんに僕の本をあげよう。この間はお父さんにあげたから、今日は、雅子さんに。」

そういつて、先生は仰向いたまゝ、一冊の「長崎の鐘」の扉表紙をひらき、棚からつり下げてあるボールペンを使つて、

雅子様

永井 隆 一九四九・三・二七

と、ふるえる手で署名して渡された。私は、本當に、うれしくおしいたがいた。

「寫眞のうつし直しなら、僕が雅子さんの『雅子斃れず』を持つて、雅子さんが僕の『長崎の鐘』を持つて見ているところを、寫してもらいましょうよ。取りがえつこしたところをね。」

先生は、そういながら、そばの書棚から、いつか私の方より先生にお贈りした『雅子斃れず』を取り出し、それを開いて讀む格好をなさつた。

寫眞班は、こゝぞとばかり喜んで、私たち二人をカメラに寫しとつた。

永井先生!! 私は先生を心から尊敬する。

如已堂を離れた私は、この尊敬する先生からいたゞいた御本を、ソツと脇から抜き出して、表紙を見た。眞ッ黒な表紙に、眞ッ赤な雲! あゝ、世紀の雲をうつした表紙は、私の胸に何か強いものをもつて、迫つてくるようだつた。

深堀少年と平さん

「あゝ、あゝ、苦しい、死んでしまいたい。水バ、水バ呉れんですか、水、水バ……。」

と、あの傷つけられた深堀少年が、一點の光もない暗黒の冷めたい壕のなかで、たゞ、野獸のようににのたうちまわっていたおそろしい雰圍氣が、そしてあの子のべとつく半身と、私の半身とのふれあい、今も私の心によびおこされてくる。戦争の悲劇の縮圖を、あの小さな壕のなかに私は見た。

あのとき、私は、どうしてあの子のために、水を汲んで来てやらなかつたのだらう。もし、あの子に、水をのませてやつたら、どんなに、よろこんでくれ

たことだろう。おなじ死んでゆく身なら、少しでも、よろこびを與えてやればよかつた。いくら、負傷していたとはいへ、再びたち直ることのできる自分と知つていたなら、死すべきもののために、どんな手助けでも、どんなあわれみでも與えるべきであつたのに――。でも、わたしは子供だつた。まだ、なんにもわからなかつた。たゞ、あの子の叫ぶこえをおそろしく聞き、あの子のふれる肌を、氣もちわるく感ずるばかりだつた。

恐ろしい一夜を、あの壕に明かして、ようやく朝になつたとき、その入口にすわつていたあの深堀少年!! ちようど、ジャガイモの腐つた皮を、引きむいたような火傷の肌が、今でも生々しく心に残つてゐる。

「姉さん、はやく諫早いさはやに行こうよ。」

とまるで、弟のように親しげにはなしかけたあの少年。あの子を最後に見たのは、たしか、壕の入口にあつた石の上で、セメントの袋を着せられて、すわ

つていたときだつた。私が見知らぬおじさんに連れられて、市内に歸えろうとしたとき、どうして、私はあの子を連れて歸えろうとしなかつたのだろう。私は、そのわけがわからない。運命の神が、私たち二人を、もうその時すでに、生と死の二つの道にわけてしまつていたのかもしれない。

深堀さん！ 深堀さん!! ごめんなさいね。馬鹿だつた私を、許してね。

四月二日の夜、明日は「雅子斃れず」の出版記念會があるので、早く起きなければならぬというのに、私は、こんなことを考えて、何時までたつても、床の中で眠られなかつた。

その日のひる過ぎのこと、一人の見知らぬ若い女の方が、私を訪ねて來られた。

いろ／＼とおはなしを伺ううちに、思いがけなくも、その方は、あのトンネル壕で運命の日の一夜を共にした深堀少年のお姉さまであることがわかつた。

一しよに逃げたり、歩いたり、汽車にのつたり、おりたりしてゐるうちに、何時となく知つた「深堀」という名前、飽の浦の住所、「長崎商業」の生徒、と
いうようなことを覚えていたまゝに私の本に書いていたのを、その方が、たま
／＼讀まれて、それが自分の弟であるということを、知られたというのであつ
た。

「名前を、光昭と申しました。」

お姉さまは、おさえるような小さな聲でいわれた。

「深堀光昭です。光昭は、光昭は死んでしまつたんです——。」

はつと胸を突かれて、私は、ことばものごにつまつた。あの日、別れてから
三年間、私は深堀さんの姿を思い出すことが、よくあつた。そのたびに、あんな
ひどい火傷だつた深堀さんは、きつと亡くなられているにちがいない、と考
えて、心さびしく思つていた。けれども、どこかに生きていらつしやるような

氣もして、いつか消息のわかる日も来るかも知れないと、半信半疑のきもちで
思い慕つていたのに……。

「雅子さんのご本を読んではいましたら、弟のことがわかつて、ほんとに、一
晩寝ずに本を読みました。泣けてく、なかなか字が見えませんでした。で
も、ほんとに、あんなに本に書いていた、いて、光昭も倅せ者です。同じ亡く
なられていつた方々でも、世間のあなたにも知られずに、去つていかれた方が
多いのですから……。弟は、あれから、偶然一緒になつた友達と二人で、諫早
に行つたらしいんですの。それからあどのことは、そのお友達が、今は元氣に
なられたので、様子を聞きました。でも諫早で降りず、肥前長田まで行つてか
ら降り、長田小學校の假救護所に、参りましたそうです。翌朝、父がすつと探
してノ、尋ね歩いて、やつとここ、にいることがわかつたのですが、どれもこれ
も同じようにひどい火傷の人たちで、一體どれが、光昭かわかりませんでした。

そして、ようやく、あの子によく似たまつ裸のこどもが、うつぶせになつてゐるのを見つけたので、おこして見ると、果して、光昭でございました、——でも、でも、もうそのときは……。」

深堀少年のお姉さまは、あとは言葉にならずうつむいてしまつた。私は、何とも答えることが出来ず、心の中でまた「ごめんなさいね、ごめんなさいね。」とくりかえしてゐた。やがて、お姉さまはつづけた。

「友達と一緒になつてからのことは、こうしてわかりましたが、やられてからその時まで、一體どこでどうしてゐたのか、一寸もわかりませんでした。先日、雅子さんのご本をみて、始めて知りましたの。これ、あの子の寫真でございますが、この子にまちがいないでしょうか。」

ふるえる手に、さし出された深堀少年の寫真は、さびしそうなまなざしで、こちらを向いてゐた。でも、私がそれを見て、あの時の形相もかわつた全身や

けごの深堀少年などは、どうしても、わかろう筈がなかつた。けれども、私はその寫眞に向つて、

「深堀さん！」

と、心から呼びたかつた。

その翌日は、長崎精洋亭で“雅子斃れず”の出版記念會が催された。

雨降りだつたのに、長崎中の多くの名士の方々やその御夫人たち、あるいは文化人達、あの原爆の閃光を、私と共に浴びたおともだちや、知り合いの方々が、百名あまりもご出席下され、盛大な、感激にみなぎりあふれた會であつた。

新聞社の方の司會で、會は進行した。父の挨拶が濟み、兄のことばも終つて、いよいよ私の立つ番となつた。耳まで紅潮して、胸がさわいだ。でも、何とも説明のしがたい嬉しさの氣持を、どうすることも出来なかつた。私は、深堀さ

んのお姉さまの、訪問のことから、天に召された深堀少年のことについて、はなした。今までのうれしさはうすらいで、胸が、一杯になつてくる。私のちやうど眞正面に、昨日いらしたお姉さまが、坐つていらつしやるのを、ちらと見た。お姉さまは、泣いていらつしやつた。眞つ白なハンカチが、ちか／＼と、私の眼を射るようだった。何か、強く胸に、こみ上げてくる。一ことごとくに、言葉が、つまつてくる。それをおさえることが出来ない。あちらこちらからすゝり泣きの聲がおこる。私は、ます／＼聲が小さくふるえだして、どう／＼何んにも言えなくなつてしまつた。

私の小さな、つまらぬ一冊の本のために、もつたいない程、多くの方々が、つぎ／＼に祝辭をのべて下さつた。やがて、司會者は、深堀さんのお姉さまにも、何か一ことを、と促した。お姉さまは、すぐ、しずかに立上られた。一堂が、急にしんとしすましかえる。ほそ／＼とした聲だった。

「あの、あの——、私は……あの、深堀の姉……姉でございます。」

わつと、その場に泣きふして、あとは無言のことばと、涙の挨拶であつた。だが、私には、そのなかに言おうとなされたお氣持が、いや、それよりも、もつと／＼深い、大きなものがよくわかつていた。

感激の嵐のなかに、涙の出版記念會は、幕を閉じた。

いつか、戸外は雨もやんで、ちぎれかゝつた雲と雲との間から、金色の光線が、石だたみの道を、明るく照らしていた。私は、その道を、ゆつくりと、歩いていった。

數日後。

あの原子爆弾の、恐ろしい巷のなかにあつて、わが身をもかえりみず、涙ぐましい愛の手をさしのべて下さつた、『平さん』に、私がたつた一ことでもいゝから、お禮をのべたいと、いつもいつも、心に念じていたので、父や兄が、八方に手をつくして、さがしていた。

その方らしい人が、ようやく、三菱精器の調べでわかり、その住所は、南高の土黒村あたりと、思われると、その近所の方に、重ねての調査を、おねがいしていた。

ところが、その方から、厚い封書が、父のもとに送られてきたのだつた。

なかを開いて、ひろい読みし、平さんの“死亡”という文字を見出だして、ほんとうにびつくりした。あんなに元氣で、働いていらつしやつた平春義さんは、あの夕闇の中に“さようなら”と、別れてから一月の後、原子症状のために斃れてしまわれたのだつた。

私の周圍に、舞臺の上の役者のように次々と現れて、あの運命の日を、共にすごした人々は、私をのこして、又次々と、昇天せられてしまった。あの、幼い深堀少年も、そして、やさしい平さんも――。

私の小さな體驗が、私にほんとにいろいろなことを考えさせる。それらが、聲をあげて四方から私に押しよせてくるような氣がする。私には未だ考へ足りないところがあり、私の小さな頭の中は、その押しよせてくるものの勢いのみだれることが多い。けれども、私はたえず眞劍に、それらに向つていたいと思う。私が一生中かゝつても、その深さは探り得ないかも知れないが、私は、私の力が及ぶ限り、謙虚な努力を怠つてはいけな、と自分に言いきかせている。

ほんとの平和とは何であろう。戦争は一つの悪夢であつた。問題は戦争が終

つたところから、さらにはじまるのではないだろうか。まだばくせんではあるけれども、いまの私には「人間の幸福」という大きな問題も出て来ている。そのことのために、私の長崎での體驗は、大きな役割をもつものである、それが更にひろがつて、私だけの問題でなくなるだろうことも、私は考えないではない。私は私の問題を手さぐりつゝ、あの桃色の閃光が、再びくりかえされないうちに、たえざる祈りを捧げたいと思う。

みごりの長崎

五月の大空は、高く、廣く、碧い。昨日の雨が、天と地の間のごみを、すっかり吸収し、ぬぐい去つてしまつたかのように、濁りのない明るさだ。その空に、いくつかの鯉のぼりが、威勢よくひるがえつてゐる。カラ／＼と鳴る風車の音も爽やかに……。

私は、読みかけていた本を、机の上に閉じた。窓べによりかゝると、庭のザボンの木の枝々は、もう、グリーンピースのようにかわいい花のつぼみがふくらんで、新らしいレモンみたいな、なんともいえない甘つばい香が、こゝまでたゞよつて來て鼻をうつ。

山々は、深い新緑のみず／＼しさが、あたりをみどりに染めるかと思われ
程、ゆたかに美しい。遠く、山の頂に、チラ／＼といくつも動いている黒い人
影は、まるで蟻のようだ。じつと見ていると、小さい風かぜのあがつているのが見
えてくる。糸にギラ／＼と光るほどのビードロをつけて、切り合いをやつてい
るらしい。もつと近い方にも、赤いのや、青いのが、いくつか動いている。

縞や格子の模様入りのおよいでいる。すぐ、私の眼の前にも一つ、まるで生
き物のように、ヒユウヒユウどうなりながら、風をきつて、斜に空を横断する。
長崎で、一番美しい、潑刺とした初夏。冬の嚴寒に耐えて生き抜き、春のう
らゝかな中にやわらかな芽をふき、今や樹々の新緑は、たくましいまでに光つ
て来た。

「素敵！」

獨りつぶやいて、ほゝえましく思う。

みどり——美しい緑！ 平和の色！ もり上る力！ そのみどりこそ、長崎のシンボルである。

原子爆弾のときを、じつと思う。いなすまの如く光つて、一瞬、天主堂はどぶ、工場はつぶれる、家々は散る。あたかも魔術のように、その長崎のみどりまでが奪われて、悉く褐色のうねりと化してしまつた。みどりなき長崎、恐怖そのものの思い出である。

今、コバルトの果しない大空を背景に、山々のみごりは、再び生々と蘇つた。青空にみごりを讃えうる倅せとよろこび——このよろこびのうちに世紀の一青年女性として、しずかに行く手を望むとき、私の胸には複雑な思い出がこみあげてくる。

初夏の長崎、みごりの長崎。お、私は、このみごりの長崎を愛する。

行幸真近なる日に——。

第三部

——父の思い出——

兄 父 石 田

穰

一 壽 (述)
(記)

その日の朝

八月に入つて、長崎に對する敵の空襲は頓に激しくなつた。

三菱造船所の事務所や工場が晝間猛烈な爆弾による被害を受けた。丁度その頃、私の官舎は元控訴院長官舎に移る豫定であつたので、防空上一日も早く引越す必要があると考へて、準備は不足であつたが、八月の九日（木曜）に長崎市勝山町二十二番地の官舎から八百屋町三十三番地の官舎に移る事に決めた。

七月の末、雅子が私の出勤中泣かんばかりの顔をして歸宅したそうで、齒が痛むといふので林君に連れられて、どこかの齒医者に行つたそうである。よほどひどく苦しんだらしく、その日も出勤している三菱兵器工場で執務中急に痛み出し、ひどい痛さに堪えられないのを我慢して泣きながら、一通り仕事を片付けてから、早退歸宅したという。どうも今年になつてから雅

子はいろ／＼體に故障が多い様だ。東京では今年一月に學徒動員で天現寺の安立電氣工場に通う様になつてから、往復の電車の混雜と、工場給食の過多とで慢性の腸カタルになり、四月長崎に轉住する頃までもすつかりよくならなかつた。

その中五月に縣立高女の學徒動員が始まり、三菱兵器の大橋工場に通勤する様になつたが五月の末には背中にハナイボが出来、長崎医大の古屋野先生や北村先生に御厄介になつたこともある。

大橋工場に通勤するには電車が混んで乗れないので、逆の行路をとつて螢茶屋の始發點から乗車し、迂回して大橋に通つていたが、それも餘りに乗客が多くて、遂に乗れなくなり、自宅から工場まで、片道一時間半の道を、毎日徒歩で出かける様になつた。朝五時に起きて六時頃には家を出、夕方六時近くに歸つて來る頃は、いかに健康は恢復しても、往復四里の歩行ですつかりヘトヘトに疲れ、空腹もひどい様であつた。私が氣の毒に思つて葡萄酒の一杯や、固パンに少しばかりの蜂蜜をつけて食べさせたこともあつた。その疲れが治つたところで毎夕父子二人で食膳に向うのを私は何よりの楽しみにしていた。

長崎の夏は早い。大變暑くなつて來た。毎日の苦闘を続けている中に無理をしたのであろう、雅子は急に齒が痛み出したのである。一週間工場を休んで齒の治療をし、一時的の應急處置をしてもらつたようだが未だ全快しない中に

「どうしても工場に行く。」

と言つて通勤を始めた。私は心配して

「今少し完全に治療を終るまで休むか、早引けしたらどうか。」

と勧めたがなかなかきかぬ。丁度九日の前日にも心配して

「明日は引越だから家に居て、その間に齒医者に行つて來たらどうだ。」

と話したが

「今工場では大切なお仕事をやつています。私のする事も他の人ではやれないから、どうしても工場に行きます。」

とやつぱり言うので、私も感心して、かえつて親として恥かしい位の思いをした。

丁度その頃同級生で親しくしている森田さんから、きれいなハンカチと何かを雅子に贈られていたので

「それではお返しにこれをお上げなさい。」

と言つて八月九日の朝、東京で私が求めて置いた絹の縞模様のハンカチと、小さい玩具人形を雅子に渡した。雅子はそれを喜んで、たしか半紙に包んで手製の救急袋に納めて

「行つて参ります。」

と言つて勝山町の官舎を出て行つた。白い服に縞のバジヤマズボンをはき、素足に下駄ばきで救急袋をかつき、元氣に出て行く後姿を私は見送つた。このバジヤマは私が八年前洋行の際、東京の越で二つ作つたもので、白、黒、水色の三條縞のものであるが、防空ズボンに良いので最近一つは雅子にやり、一つは種一の寝巻バジヤマにやつていたものである。

この日は引越の朝なので私等は皆早く起きていた。役所の山本書記長、森會計主任が来て、午前中に済ませようと八時過頃から仕事を始めた。引越し先は勝山國民學校をへだて、僅か半町もない位近い所である。手傳いには女の雇さんや給仕さんが加わり、又庄野監督判事と中村

判事も援助に來られた。

よく晴れた陽の強い朝であつたので、私はガーゼの半袖シャツと國民服のスボン、國民帽を着けて一緒になつて働いた。自宅に居た家人は私の外には、次女、三女の家庭教師として東京から一緒に來ていた林昌子君母子と女中山口しげの三人だけである。次女、三女は一月前に福岡に疎開してゐた。

朝早くから警戒警報が出、空襲警報も出たり、解除になつたりしてゐたが、引越しの仕事で夢中になつていたので、餘り氣にもとめなかつたし、手傳いの人々もそんな事を願みないで働いてゐた。

丁度十一時頃には空襲警報が解除になつて私と庄野君、中村君とで大きな洋服ダンスを八百屋町官舎の中廊下に据えてゐた。それが終り、三人で縁側に坐つて一息入れた時（十一時二分）という正確な時間は後でしらべてわかつた。）突然、

ピカツ、、、と四圍が明るく丁度寫眞のマグネシウムを直ぐ近くでたいたように白く強い

光が一面に閃めいたので、おやつ、と思う次の瞬間

ガラガラ、、、ツドドン という大きな音がして、家の中は一時に壁や建具が飛散し引続き一寸の間、一面家屋がグラつき、家の中がメチャメチャになつた。床野君が最初に

「爆弾だ！」

と言つて立上り、洋服ダンスが前の柱に倒れかゝつた時まではよく判つているか、それからメチャメチャで、私はすぐ關東の大震災の當時の經驗を思い出し、大地震のような氣がして柱の側に這つて行き、柱を掴まえて暫く俯伏に身構えをしたが、家の動きは甚しく壁土の落ちた土煙等で皆がどうなつたか判らなかつた。

一分間もたつて靜かになつた時、私は何處か餘り近くない所に大きな爆弾が落ちたものと考へて立上つた。四月前まで東京で爆弾の落下音を屢々聞いていた私には、この時の音響にはズブツツと言う爆弾の落下する音が聞えなかつたので、始めはどうも爆弾ではないような氣もしたが、少くとも近い所に落ちた爆弾だとは思わなかつた。

私は手足に多少傷を受けたようだが、大した事はない様で、大丈夫だと思つた。立上つて、

あたりを見渡したが一寸誰も見當らない。その内に中村君がひどく怪我をしているのに氣付き、又庄野がどこからか出て來た。ホツとして戸外に出てみると、北隣りの官舎の屋根に大きな穴があいてをり、私の官舎の屋根も随分ひどく飛ばされている。これは隣家に爆彈が落ちたのだなと思つた。

勝山町の官舎の破損は、八百屋町官舎よりもなおひどく、屋内は勿論屋根もひどく破壊している。この附近一帯のどこの家も大破損であるので、私等はこの方面が被害の中心地と思つてこれだけの被害があるのに、何故役所から職員が一人もかけつけて來ぬのかと不思議に思いつゝ、正午過頃に私と庄野監督判事、山本書記長等で裁判所の廳舎を見に出かけた。

役所まで五六町の道を、ステツキをつけて歩きながら、私は引越しの最中の慘事でも死人が出なかつた事を何よりの事と喜んで、自分の手や足の痛いのを忘れる様な心持で歩いて行つた。そのときは未だ數日前廣島に投下されたのと同じ原子爆彈とは私は知らないでいた。

我が子歸らす

役所に着いて見ると地方裁判所の正面二階の所長室と会議室邊りの天井が墜ちて、この辺りが一番ひどい被害であつた。もし私が役所に居たら、その當時会議室の北寄りに所長の席を移していたので、この時刻ならば、きつと天井や屋根と共に墜落して死ぬか、重傷を負うかしたろうと思つた。

官舎は引越しの最中であつたので、家財等も勝山町と八百屋町に半ばして打棄らかしのまゝで、林母子もどうしてよいのか途方に暮れているだらうと思ひ、一寸その指圖をするつもりで八百屋官舎に歸つて來た。果せるかな、歸つてみると、林君の母は立山の後に黒焰が昇り、長崎驛の辺りからも、大分煙が見える模様なので周章狼狽して早く逃げようと呟いている。

林君と女中しげと二人でどうしてよいか判らなくて困つてゐるところであつた。私はまだ逃

げるところまで来ていないと思つて、防空壕の中や、庭の土穴に書類や衣類等二、三を投込んでいた。すると間もなく庄野君と山本君が飛んで来て

「あれから直ぐ控訴院の屋根に火が出た。縣廳の飛火だと思われるが、風が急に強く、直ぐに火がまわつて、最早役所は裁判所も控訴院も全焼だ。」

と報告したので、私は呆氣にとられて一時茫然となつた。そして次の瞬間には、六十年の輝かしき歴史を有する我が裁判所の廳舎も一朝にして灰燼に歸したかと思つて、一抹の淋しさと責任の重さに胸は苦しかつた。庄野君達も、全く意外に火のまわりが早く強くて、何の手を施す事も出来なかつたし、消防隊もどうする事も出来なかつたのだと残念がつている。直ぐ出かけて見ようと言つたが最早その附近には近寄れぬとのことで、もう何とも出来ない。

陽がトツブリ暮れて、市街の彼方には火焰が赤々と燃上つている。雅子の事を考える念が湧然と起つて来た。もう歸つてもいゝ頃とも考えたが、とても四圍の様子では、西山の方を山越してもして来なければ歸られまい。道不案内で随分困るだろうとも考え、いろいろに胸を痛めた。林君が

「三菱兵器では警戒警報が出ると、すぐ仕事をやめて、どこか近所の森の中に待避することになつていたので、今朝は早くから警戒警報が出ていたから、きつと。待避していたに違いない。怪我はして居られないでしょう。」

と言う。これは私の心を大變和らげた。當時は原子爆弾の被害がどんなものなのか、少しも知つていないので、たゞ待避さえして居れば爆風をよけて、安全であろうと考えたのであつた。その中に山本書記長がひよつこり出て来て

「所長さんが少しもお嬢さんのことを言われぬので、私は御心中を察して、実はこつそり縣立高女に尋ねて見ましたが、全く消息が判りません。西山の方を山越しゝて行く道も連絡がなく、とても、行く事が出来ません。學校でも數百人の生徒を出しているので校長始め大變心配して、途方に暮れて居られました。とにかく負傷者が伊良林國民學校に收容されて來てゐるので、すぐそこへ廻りました。こゝでは負傷者が沢山、悲痛な聲を上げて苦しんでゐるのを見ましたが、とてもお嬢さんは居られる様子はありませんでした。きつと今晚はどこかに逃げて居られるかと思ひます。とにかく明朝にならねば判りません。」

と報告して呉れた。これは、まだ死んで居られるという譯ではないと慰める意味に受取れて私は山本君が重い負傷をしながら、それまでに心を配つて呉れたことが勿體なくて、衷心から有難く思つた。

私たちは全く疲労して縁側に横になると直ぐうつらうつら眠り出す。眠つたと思うと直ぐ敵機來襲だ。物凄い爆音であるが、後には起上るのも面倒になつた。たゞ蚊が多くて困るので蚊取線香を探し出し、壊れた瓦の上で數本燃やして群がる蚊を追い乍ら交替に眠ることとした。

私も起きては敵機の來襲を頭上に警戒し、替つては蚊やりの側にうつらうつらして雅子の事をいろいろに考えた。もう今夜はとても歸るまいが、今どうしているか。明日の朝歸つてくれればよいが。或は既に工場で爆死しているのではあるまいか。山本君の報告は一時私を慰めて呉れもしたが、學校の様子では、三菱兵器は餘程ひどくやられた模様である。こゝが被害が一番ひどい様な口吻であつたので、どうも「やられたな。」という不安の念が次第に募つて来る。雅子の事を考えると頭腦が冴えるが、又すぐ疲れて眠りに陥つた。

その中に敵機の來襲も止り、靜かな明るい朝となつた。私はもう雅子が歸つて來ないものか

と官舎の表に出かけて見ると、官舎の横側道路の下の方から雅子の歌い聲が聞えて来るのではないか。私は胸躍らせてその方へ急いで行つた。見ると、丁度十四、五間の向うからやゝ下り坂の石畳を、雅子は學友三名の真中に腕を組んで、元氣に笑い乍ら、朝陽を浴びて足も軽く、朗らかに工場の歌を歌いつゝやつて来る。あのバジヤマのズボンをはいて……。

數日前私がラジオで聞いた工場の歌で、雅子に、「あれはいゝなア」と話した事のあるあの歌を歌つて元氣に、顔にはえくぼさえ出して歌つて来る。私は思わず「あゝうれしかつた。」と胸一杯の喜びをもつてその方に近よろうとすると、雅子達は私の姿を見ると一寸立止り、雅子だけが進み出て

「マア素敵！マア素敵！」

と大きく叫んで私の方へ早く歩いて來た。私は思わずたまらなくなつて雅子の方に近寄る。この頃、雅子は、よくうれしい時に「マア素敵」という言葉を出していたので、何か私の様子にうれしい事を見出したのだなという氣がし、その意味はなんだろうかと私はチラと考えた。が、とにかく私が元氣にしている様子を見てこんな言葉を出したのだろうかと考えた。そして自

分も思わず、進み寄り、雅子も急いで私の所へ飛んで來た。私は「無事でよかつた」と感謝の喜びを満身にこめて、飛びつく雅子を抱きしめた。しつかり抱きしめると同時に、私は全身から一時に汗が出た様に思うと、バツト眼が覺めた。夢だつた！ 私の體は冷汗でぐつしより濡れている。

正夢か。 逆夢か。

これは何だか逆夢のように感じた。

私は一昨年妻高子が病院で病重くなつた時、成田山に參詣祈願していた頃、やはり夜中にありありと夢を見た。高子とそれに既に亡くなつてゐる福岡の老母と私の三人、太宰府神社とかこの神社に、高子の全快御禮に參詣してゐる夢を見て、翌朝目覺めるまで腦裡に残つていたことがある。この時全快は嬉しいが亡き母と一緒に詣りしてゐるのは變だとも考え、又この夢は母が庇護してくれて全快する様にも思われ、左様に念じていたものゝ、遂に逆夢となつた事が心に残つてゐるのを直ぐ思い出した。それでこの雅子の事も何だか逆夢と思われてならない。これはひどい怪我をして、今死んだのだな、と全くはつきりその心になつた。もう諦める

より仕方はない。ホロリと涙が出た。今、息を引きとつたのだと思つゝ、私は寝たまゝ直ぐマツチを探して、懐中時計を見た。

午前三時に五分前である。

何だか急に元氣がなくなつて起上るのもいやになつたが、しばらく縁側に腰かけてボンヤリしてゐた。邊りは眞暗で静かである。側には三、四人の人がグー／＼眠つてゐる。私は諦めるより仕方がない。と心に二三度くりかえして、又仰向になつた。餘程疲れがひどいと見えて諦めよう／＼と考へつゝ何時しか又眠りに落ちてゐた。

奇蹟の生還

その翌朝門の外に出て見ると、陽は強く、負傷者、殊に火傷をした人たちが街を通るのがズツと續いている實に慘憺たる情景である。立山の方から何人も何人も足をひきすりながら下りて来るものもあれば、他人に負われて苦しい息をつきながらやつて来るものもある。擔架で運ばれて来るものはまだ少い。火傷のものは殆ど衣類が破れて男も女も半ば裸で、ひどい火傷のため肉がムキ出ているものが多い。皮膚が剝れた様にブラ下つて、肉は丁度水蜜桃の皮をむいた様な色である。そんな姿で幾人も幾人も下りて来るのをとても正視するには忍びない。

三菱の兵器は全滅で、女學生は全部死んだという聲が私の耳にしば／＼入る。

朝八時頃になつても雅子は歸つて來ない。山本書記長がやつて來た。

「今女學校で聞いてみると、今朝四十一人だけは學校に通知があつて生死が判つたが、他の何百人かは、まだ何とも消息が判らない。連絡がとれないのだが、その中に判ると思う。今しばらく待ちましょう。」と言う。

又誰からか、「三菱兵器の動員女學生は警戒警報では待避しないで、空襲警報の時だけ待避するのだ。」とも聞いた。それではいよいよ本當に雅子もやられて居るなど考えた。夢の話は誰にも話しては居ない。

しかし私は、大切な長崎の役所を預つている。仕方がないではないか。雅子は諦めよう。役所に行つて焼跡を見て職員を指揮しよう。

せめて次女の泰世や三女の靜子達が福岡に疎開していただけでも仕合せではないか。こんな氣がすると私はもう何も考えないで職員二、三のものと裁判所の焼跡に急いで行つた。

私の頭にはもう何物もない。足どりも不思議なほど元氣に裁判所の焼跡にやつて來た。丁度元控訴訟の前まで來ると、田川務辯護士が來合せて、今から大橋の三菱兵器に出かけると言

つている。だん／＼聞いて見ると三菱兵器は昨日全滅して、今澤山の死屍が横たわつていと
言う噂である。

「澤山の死體が横たわつて焼けているそうです。私の娘も、この工場に行つて今朝まで歸ら
ないので、もう死んでいると思います。これから浦上の方は通れないので、山越して大橋に出
て、せめて娘の遺骸を探して來ます。これだけが今となつては、父親の勤めと考えます。」
と言つて、この人もすっかり諦めている様だ。私は思わず田川氏の親心に頭を下げた。

「私の娘も実は兵器に行つていますが。」

と話す、偶然、田川辯護士のお嬢さんも同じ縣立高女の三年生で、工場でも雅子と同じよ
うな事務の仕事をやつてゐるとの事である。

「それではお互に駄目でしよう。」

と話し合ひ、同氏に雅子の名を告げて、手帳に書いてもらつて

「もし様子が判つたら知らせて下さい。」

と頼んで、同氏と別れようとしてゐるところに、ひよつこり、有浦書記が飛んで來た。

「所長さん、お嬢さんが歸つて來られました。元氣に歸つて來られました。今官舎で休んで居られます。怪我はして居られますが大した事はない様です。」

今の今まで私の周圍を取り圍んで吉田判事、その他四、五の職員が私を慰めていてくれたのが一時に明るい顔にかえつて吐息をついた。私は嬉しいというよりも一時茫然となつたが、すぐに何とも言えぬ感謝と喜びの心持が體中に漲つた。それと同時にそこに居られる田川辯護士に、何だか氣の毒で、濟まない様な心持がして、今度はこれを慰める言葉に窮したが

「とにかく雅子も歸つて來たのだから女學生全死とは言えまい。是非早くお出かけになつてお調べなはれ。」

と激勵し、同氏が急いで彼方に走つて行くのを見送つて、お嬢さんの安泰を心に祈つた。(後で田川氏のお嬢さんも無事だつたと判明した。)

もう私の氣持はやゝ落付いた。歸つて來れば生命は大丈夫だ、とやゝ安心して、しばらくの間、廳舎の燒跡を見聞して後、急ぎ官舎に歸つて來た。官舎の臺所入口に、雅子が林君の看護を受けているのを見た時のうれしさと、有浦君の言つた様に怪我は小さなものでなく、相當ひ

どい様であつて、頭や額や首筋やその他手足に血がひどくついているし、元氣もなさそうにしているのを見て、一時に不安の念が起つた。この悲喜錯交の一瞬はどうしても言葉には表わせない。思はず雅子の側に寄つて雅子をしっかりと抱えてやつた。「よかつた〜」と言つたことは覚えてゐるが、雅子が何と言つたか思い出せない。おそらく「お父様！」と言つただけであらう。雅子も涙ぐんでいた。私の臉も熱くなつてゐた。

雅子の側には雅子が着ていた上衣や例のパジャマが眞黒な血だらけに染んで置いてあつた。足の裏から血が滲み出て居り、頭は、林君が縋帶で鉢巻している上にまで血がひどく滲んでいる。額は一面痣になつたように紫色になつてゐる。九死に一生を得たと言うよりは、全く奇蹟的に助かつたと言うの外はない。私はほんとうに神佛の加護という氣がした。そしてその際卒直に言つて、亡き妻高子の靈が雅子をしつかり護つてくれたのだと堅く信じた。

然し午後二時頃から亦敵機の來襲があつた。傷の痛みに苦しんでいる雅子を、その度に防空に這入らせることも出来ない。そこで、立退先を豫定してあつた、田上の徳三寺に直ぐ移ることに決めたのである。

病む頃

八月十日から同月二十九日までの廿日間、田上の生活が続いた。そしてその間、八月十五日に停戦の大詔が下つたのである。

田上に避難した翌々日、徳三寺の御主人で錬成道場の先生杉山種雄氏の紹介で、すぐ近所の養生園という病院に雅子を連れて行き、その院長蔦本優先生の診察をうけた。田上の清浄な空氣と徳三寺先生夫妻の親切と、それに偶々この病院長の診察を受けることになつたのは全く天祐である。當時の長崎には医者もなければ薬もない。かような山の中で立派な医師の治療を受ける事は、とても豫想しなかつたところである。徳三寺から山道で林の間を潜つて約半町、大きな立派な病院が出来ていたのである。

院長は一寸風変わりな無口の方だが一見して中々稀な氣骨のある立派な医者だと思はれ、徳三

寺の杉山さんがしきりにその人物を褒めていた事がすぐ頷づかれた。自分と林君が雅子を背負う様にしてこの病院に來た時には、既に澤山の災害負傷者が、見るも哀れな氣の毒な位に怪我をして治療を受けていた。診療の結果、まあ心配なことはあるまいと言われたが、此の時は後頭部に一寸位いの切り創が血で塞がりかけて、ひどく痛む様だ。左額から、左前頭にかけての打僕傷は相當ひどく、額の半分以上が黒紫色に濃く廣く痣の様になつてゐる。殊に兩眼の縁は眞黒く、眼の玉が氣味の悪い様に、大きく光つて妻く見える。まるで人相が變つてしまつた。兩脛、兩膝、兩足裏等、いたる處に切創や、ガラスの踏み抜き等がある。後頭部の切創は餘程出血したものと見える。これが若し口が塞がると大変だと言つて、先生は無理に創口を開く。雅子に非常に痛がつたが、私や林君が側から激勵した。

「前頭の打僕傷は、幸に下皮出血で、頭腦が重くはなるがそう心配はなく、次第によくならだる。若しこれが内出血だと致命傷であつた。」

と言われた。然しこの打僕傷による前頭の黒紫色は三寸巾位も額に廣がついて、あまりにひどいので、私は、「どうしても左額の半分位は必ず黒い痣が残る、雅子の顔も醜いものとなつ

て、一生この痣はとれまい。」と心の中では憐れにも思いつながら、それでも助つてよかつたと考へた。先生は、餘程注意を要すると注意されたが、まあ心配は要らぬとの最初の一言でやゝ安心して歸つた。

その頃には、もう私の外部の負傷は、殆んど治つた。

雅子は毎日、養生園で治療をうけた。しかし私は、公務が忙しくて、其後暫くこの病院について行くことは出来なかつた。然し終戦の頃までの雅子の容態は次第に悪くなつて行く。食慾も次第に衰へた。終日極く少量の食事をとる様になり、時々嘔吐を催すことさえあつた。體温は常に三十九度となり、殆んど四十度臺になつた。終日水枕で頭を冷やし、寝たまゝ體を動かすことさえ困難となつて、最早敵機が來ても待避する事なんか出来ないようになつた。

その頃私は毎朝五時頃には起床して、殆んど何時も警戒警報中を早目に下山して、裁判所の焼跡や八百屋町の官舎に行つて白石部長、其他同僚職員諸君と事務の連絡をとり、夕方は遅く官舎から、米、鹽、油類の食糧から手廻品までをリュツクサツクに重く擔いで、田上に歸つて

來る。約一里の坂道は日頃の私ならばらくではなかつたが、此頃は晝間は一切を忘れて役所の御奉公に氣を紛らわし、同僚諸君の雅子慰問の言葉も軽く受けて居たものゝ、日暮れて山路を急ぐ頃には、胸一杯雅子の容態を氣遣つて、足は自ら早走りとなつていた。とても日頃の私ではなかつた。

石畳の坂を半ばにして、右に折れ、急勾配の山道を登つて行くと、山畑に農家が一、二軒、その横を過ぎて向うの丘に、徳三寺がある。凡そ一時間はかゝつたが或日の如きは急いで裁判所焼跡から僅かに三十分で駆け登つた。盛夏の炎暑で何時もビシヨ濡れの汗となる。

寺に歸ると、必ず先ず井戸の傍で冷水を頭からかぶつて齋戒沐浴して、心に雅子の恢復を祈りつゝ、靜かに雅子の側に行つたが、雅子はいかにも終日淋しく待ち侘びていたような顔をしているし、容態が次第に悪くなつて丁度二、三日目、養生園の先生から

「淋巴腺に來ました。」

と言われた由、林君から報告を受けた時の私は、もう駄目かと思つて、全く終日の疲労などは吹き飛んで、一時に悲しい氣持になつたものである。

或日は早朝から夜の九時過ぎまで、二回も長崎の街との間を往復しなければならぬ程に、役所の仕事に追われたこともあつて、雅子の側に添寝して看護しつゝも思はず眠りに陥つたこともあつた。然しこの淋巴線の痛んだ時は、雅子が横向きに寝た儘、一寸でも頸部や脊中を動かすと切られる様に痛い々と泣き出しそうに苦しんでいるので、殆んど一晚中眠らないで私もその後横になり、雅子の背中を、指先で撫でる位の軽さにもんでやつた。頸筋から肩にかけてコチコチに固くなつてゐるのに驚いたが、静かにもんでやると、いくらか氣持がよくなつて、うとうとと眠り出す。それが何より嬉しかつた。

淋巴線の痛むのは二三日続いた。終戦大詔喚發當時、縣廳其他との關係があり、長崎に於ける司法部の責任者として、これらの會議、連絡等、連日多忙であり、晝間は全く公務に追われていたので、病院の先生を訪ねることは、勿論出来ないでいた。丁度終戦直後、雅子の食慾が次第に甚しく衰え、高熱に苦しんでいた頃、何かひどい解熱の注射をしたとのことで、注射の際、雅子が痛がつて貧血で倒れたと、林君が非常に心配し

「お父さんが晝間居つて下さると、雅子さんも、どんなに心強いか……。」

と話して呉れたが、その頃はとてもそんな余裕の時間は無かつた。やつと夜の看護以外には何とも仕方なく、心の中には祈念しつつ、やつぱり市内への下山を続けた。

朝露を踏んで山を降り、夕べに星月を仰いで歸る。この山坂を降り登る毎に、私は人生の行路というようなことを色々に考えた。三年前には妻(文博井上晋次郎四女 高子三十八歳卒)を喪い、今年四月私は三十年住み慣れた東京の土地を始めて離れ、三人の子女を伴つて、長崎に赴任して來た。長男は成蹊高等學校文科二年生であるので、東京に残した。長女は東京女高師附屬高女三年生から縣立長崎高女に轉校し、次女、三女は共に同附屬國民學校の四年生、二年生から一旦長崎師範男子部附屬に轉校したが、どうも長崎は危険近しと思われたので、七月早々、戰災直後の郷里福岡に疎開させて、義妹の許に預け、同市高宮國民學校に通わせた。こんな譯で自分の膝もとには長女雅子一人を置いて、この難に遭つた。雅子こそは原子爆彈の難を受ける爲めに、東京から連れて來たような心地がする。今はこの雅子の生死が私の頭腦に重い。街では遭難者が漸次死んで行く。昨日は何處で、今日は此處で又死んだと聞く……。

山は降りつゝも、前に萬岳の聳ゆる思いがする。坂は登つても千仞の峽谷が眼前に迫つてゐるような氣がする。それから先自分の家庭には、まだ／＼幾多のことが起るであろうが今こゝに雅子は寝ている。折角自分で此處まで闘つて來てゐるのだ。どうかして助けてやり度い。私が餘程しつかりせねば駄目だ。私が参つたのでは雅子は倒れる……

こゝまで考えると、何時も私は、映畫の「父ありき」(松竹 笠智衆主演)を思い浮べた。この映畫は非常に好きで、東京に居る時、雅子や穂一を連れて一諸に見に行つたこともある。これを見ては獨りで眼を濡したものである。その場面を色々に思い浮べては、父性愛は何ものにも負けるものでないというような勇氣を振り起した。そのせいか、自分でも不思議な程に元氣であつた。全く氣が張つてゐたのだ。

幸なことに、解熱剤注射の翌日頃から、次第に熱も下がつて來た。暫くすると食慾が出て來た。殊にその頃から私の秘藏してゐた梅燒酎を、毎日少量、水を割つて飲ませて見た。これは數年前、亡き妻が水戸の梅と鹿兒島の燒酎、琉球の砂糖等で作つた上等のもので雅子も非常に喜んでうまそうに飲み、次第に元氣が増し食慾も進んだ。

そうなると山道を急ぐ足は軽くなつて来る。黄昏、遙か向うの小高い丘の上に竹林を圍んで徳三寺が見える頃には、もう直ぐそこだ雅子は助かる、と汗を拭き乍らも勇んで行く……。

檢事正夫妻やその家人、徳三寺御主人夫妻等も、張合が出て一層雅子を慰め、注意して呉れるようになり、容態は次第によくなつて行つた。

十日目に養生園の先生を訪ねると

「もう大丈夫です。たゞ今度の爆弾は、毒ガスのようなものがあつたと見えて、自分の所に來た患者は、始め二、三人すぐ死んだ者もあります。その中には私の親類もあつて、これは外部の負傷というよりも、皆胃腸等内臓の傷害がひどい。これが今度の特殊の症状と思われるので、全く警戒を要します。食慾がなく嘔吐を催すのが例です。然しお嬢さんは、幸い内臓の傷害も止み、注射によつて熱も下つたので、もう大丈夫生命の心配はありません。暫く静養なさればよろしいでしょう。」

と告げて呉れたので、始め又私は安心し感謝したのであつた。

その頃まで、雅子は被害當時のことを聞かれるのを、とてもいやがつていたが、だんだん話

すようになつて来た。しかし、まだ頭は重いそりで、記憶は、やゝ混沌として充分はつきりしない。後で考えると、これも原子爆弾の被害の一症状であつたのだろう。

新鮮な野菜を、徳三寺から下さるので皆がどれだけ喜んだことであるか。茄子も生のまゝ、毎朝軽く鹽をつけて嚙つた。私も一層勇氣が出て或晩の如きは、自分から進んで道場の少年達の中に入つて座談會を催したりした。吉川壇判事の奥さんが、田上に来て、一日、二日いろいろ世話をして下さつたことも嬉しかつた。又女中であつたしげが自宅の茂木宮摺もぎみやすりから新鮮な梨の実を澤山持つて見舞に來た。これは、雅子が非常においしく頂いた。二十三、四日の頃檢事正達家族は、自分の官舎に下山された。雅子も試みに官舎まで往復して見たが、異常も起らぬようであつたし、医者はよろしかろうとの話であつたので、八月二十九日遂に思い出の多い田上の徳三寺から雅子を中心に足もかるく長崎の町へと下りて來て官舎に立戻つた。この頃には最早雅子の額辺の痣色が薄くなつて殆んど平常のように見えていた。私は不思議に思つた位である。

長崎を離れて

八月三十日福岡の義妹千代子さん

(當時應召中であつた
弟醫博石田義夫の妻)

が、甥の五高生、よしかず嘉一と共に突然官

舎に見舞に來た。福岡で医師達の話などでは原子爆弾の被害は醫學上とてもひどいものだから、雅子を是非福岡に連れて行くと言う。私は、それ程までにしなくとも思っている中に、次第に醫學上原子爆弾の症狀が深刻だとの噂が擴がつて、いさゝか心配になつて來た。爆心地附近は七十五年間生物が住むことさえ出来ないと言ふような新聞記事もあつた。怪我一つ受けない者でもバツタリ道で斃れたり、浦上に死體を發掘に行つた者さえ一週間位で死亡している実例を聞くに及んで、益々心配になつた。

連日豪雨が續く。官舎の建具の破れから、雨や、風が室内を襲う。雅子は又急に悪化して時々目まいがすると言つて全く元氣がなくなつた。私は愈々心配して田上にはせ登つて養生園の

先生に聞くと

「実は御注意しようと思つていた所でしたが、雅子さんはこの際二、三ヶ月是非静養して無理な運動をさせない様に。これが一番肝要です。どうも一般患者の容態がよくありません。」と注意された。愈々氣になつて來た。

その時、偶々熊本医大教授世良完介博士が、當時裁判所の假廳舎にした玉木高等女學校に私を訪ねて來られた。この博士は私が東京で豫審判事時代、東大法醫學の先生として知り合つていた友人であり、私が裁判所の長官をしているのを知つて、わざわざ見舞に來て呉れたのだ。博士は原子爆彈の患者調査の爲、熊本医大より出張して、既にしばらく滞在、明後日熊本に歸るとのことで、雅子の話をする。

「それは、是非、血球を検査せねばならぬ。たゞこの際、長崎に居るのは絶対によくない。空氣のよい海岸か、山林地で二、三ヶ月静養しなさい。」とすゝめてくれた。

その翌日、新興善國民學校で、同博士の検査をうけると、雅子の白血球は、一八五〇しかな

5。(普通六〇〇〇乃至八〇〇〇で一〇〇〇以下になると、直ぐ生命危険という。)赤血球は三六〇萬であつた。(普通四五〇萬乃至五〇〇萬)

これには、自分も驚いたが、先生も、これは患者と見るべきで、一刻も早く長崎を立退く様にといろいろと親切にすゝめて下さつた。まご／＼しては居られない。歸宅するとすぐ千代子さん達に話して、これは一刻も早く福岡へ連れて行つて貰う外はないと決し、翌日、(九月八日)取るものも取り敢えず、千代子、嘉一の兩人に偶々福岡へ出張の森會計主任、山榮書記も同道して、雅子は福岡へ發つた。

私もその頃(九月十三日)検査すると、白血球五二〇〇、赤血球二九〇萬、ヘモグロビン九三%であつて、白石部長や、庄野監督判事よりも白血球も多く、元氣一杯であつたが、兎に角自分のように元氣でも白血球の少くなつていたのには驚いた。白石、庄野兩君は、カルシウムの注射を續けていたが、私は一回で止めた。必要ないと思つたからである。

(九月十五日、雅子の白血球更に減つて一六〇〇となる。九月二十二日、壽は白血球五六〇

○、赤血球四〇〇萬、ヘモグロビン九四%

その後、雅子は千代子さん達の親切や、山田その小母さんの附添いの下に九月二十日九大澤田内科に入院し、経過良好。(九月二十七日雅子白血球六一〇〇になる。十月十二日には白血球は九四〇〇となつて聊か多過ぎる。赤血球二五〇萬、ヘモグロビン六二%體重三七〇〇(瓦福岡の先輩知友等実に多數の方々(澤田部長、林主治医は勿論、柴田民之助氏、境挺三君等列擧に違なし)の御投護の下に病状も次第に快癒した。やはり病院に入つたことはまことによかつたと思う。十月十八日、全快して退院。野間の自宅(母の別宅であつた山莊)で休養し、昭和二十一年一月十二日、私に連れられて懐しく又痛ましき思い出の長崎に歸つて來た。そして十四日から又、縣立長崎高女に通つてゐる。

後頭部切創の跡が時々かゆくになると言うこと以外には何の変わりもなく、額や眼の縁にも痣の様なものも少しも残らず、前よりは體重も多くなつて、ぐつと健康になり、明るく朗かに通學してゐる。

長い間、雅子の事を氣遣つて下さつた校長山本千里先生達が、衷心から喜んで、いたわる様に迎えて下さつた。雅子も幸福であり、私も家族も皆感謝に満ちている。

雅子の手記にある太田さん、平さん、海軍さん、朝鮮のおじさん、杖を下さつた男の方等いずれも麗わしき情の人々に心から厚く御禮を申上げ度い。今あなた方は何處に居られるのだらう。何時も私等はあなた方の健康を祈つている。それと同時に雅子の先生や學友を始め、幾多の御氣毒な方々の冥福を祈つて熄まない。

以上は總べて父としての感謝の記録に過ぎない。私の夢は幸に正夢であつた。これは全く神佛の加護と皆様の懇情による結果だと深く感銘している。

爆心地を行く

石田穰一

爆裂一瞬

地上のすべては粉碎された

現出した生地獄の跡

道をはさんで

瓦礫の街は広い

新日本建設の

尊き犠牲となつた

數萬の生靈は

こゝに眠る

爆心浦上の地

たゞ一面

荒涼として

丘の浪につゞく

アトミックファイルドの

根こそがれた煙突の側に

一群の白鳩が

無心に遊んでいる

美しき夢の長崎は

全くの

廢墟と化してしまつたのか

借いや

造バラックが二つ三つ

崩れた天主堂の丘の下に

遠く造船鉦打ちの音

そして教會の鐘の響き

長崎にも

新生の芽は崩えているのだ

長崎市浦上松山町の爆心地にて

(一一一・一・三三)